

LRG にみる図書館へのビブリオバトルのすすめと 図書館ビブリオバトル現状

○嶋田 綾子（アカデミック・リソース・ガイド株式会社）

1 はじめに

アカデミック・リソース・ガイド株式会社が刊行する『ライブラリー・リソース・ガイド(LRG)』は、図書館に関する話題や事例を紹介する季刊雑誌である。日常的に図書館に関する情報を収集する過程で得た図書館でのビブリオバトル開催の状況を本誌の紹介とともにレポートする。

2 『ライブラリー・リソース・ガイド(LRG)』の紹介

LRG第5号¹⁾では、谷口忠大さんにインタビューを行い、ビブリオバトルと図書館で開催するためのポイントを伺っている。

本誌では、イベントごとではなく日常的事業としてのビブリオバトル開催の考え方や、図書館で開催した場合に考えられる音や紹介内容に関する問題などに対する考え方などをコンパクトにまとめた。

また、インタビューのほか、特集でもビブリオバトル実践館の事例を紹介しており、これから図書館での実施を考えている図書館員は必読である。

3 公共図書館での実施状況

公共図書館での実施が確認されているのは、現在156館である（ビブリオバトル普及委員会事務局調べ）。これは、全国の公共図書館の約5%が実施していることになり、新しい読書イベントとしては、かなりの普及率である。

2011年の奈良県立図書情報館での実施を皮切りに、徐々に実施館が増えてきている。また、図書館での開催の普及には、図書館総合展での実施や、Library of the Year 2012 大賞を受賞したことも、要因として考えられる。

4 図書館で開催するメリット

図書館は誰もが利用できる施設であるため、ビブリオバトルも公開型で実施されることが多い。公開イベントとして行われる図書館のビブリオバトルでは、多様な参加者を集めることができる。

また、ビブリオバトル開催時だけではなく、開催後も展示などで紹介できるため、図書館の本紹介コンテンツとして活用できる。さらに、ビブリオバトルをきっかけに、普段図書館を利用しない人を含め多くの人が図書館を訪れるようになる。

ビブリオバトルを実施している図書館は、参加者のサークルやコミュニティを形成することがあり、その場合、SNSを活用するケースが多く、図書館のSNS活用のきっかけとなっている。

5 図書館での実施傾向

図書館は誰もが利用できる施設であるため、ビブリオバトルも公開型で実施されることが多い。テーマや参加者の設定では、テーマを決めないものからテーマを決めての実施、参加者についても、誰でも参加可とするものから中学生限定、さらには本のプロである司書限定といったものまでバラエティに富んでいる。

また、ビブリオバトルを実施するだけではなく、実践講座を開催し、参加者を増やす試みも行われている。さらに、参加者同士が集まり、図書館を拠点としたサークル活動やコミュニティも生まれている。

6 特色ある活動

先にも述べたとおり、図書館でのビブリオバトルをきっかけとしてサークル活動に発展した例がある。奈良県立図書情報館や生駒市立図書館などで行われているサークル活動では、図書館と協力し、ビブリオバトルの開催を支えている。

東京都立図書館では、いつでもビブリオバトルが実施できる会場を提供している。専用部屋が空いていれば誰でもビブリオバトルを行うことができる。

堺市立図書館では、バトラーに紹介した本などを掲載した名刺大のコミュニケーションカードを発行している。このカードを使って、参加者同士のコミュニケーション活性化の一助にしている。

参考文献

- 1) 谷口忠大、図書館でのビブリオバトル実践アドバイス、ライブラリー・リソース・ガイド、5、50/64（2013）

『ビブリオバトルハンドブック』の提案

○粕谷 亮美（サンタポスト/ビブリオバトル普及委員）

1 企画主旨

ビブリオバトルについては、2冊の既刊があるので（文春新書『ビブリオバトル』¹⁾、『ビブリオバトル入門』²⁾、それとあまりダブらないものにする。ハンディな手帖タイプにして、持ち歩けるようにし、ビブリオバトル開催時に発表された本やチャンプ本の記録ができるようなものにする。

2 構成案

① ルール説明と補足

② 開催例

- ・ワークショップ型・イベント型・さまざまな場所での事例をあげる
- ・家族・職場・学校・河原・山頂・古民家・カフェなど、各地からの報告をもとにする。

③ ビブリオバトルアイデア集

- ・ビブリオカード
- ・投票方法
- ・テーマバトル／児童書・絵本・怪談・英語しぼりなどの事例など

④ まんが「ビブリオバトル読本」HPに掲載している Siencethrough 発案のもの）より「ビブリオバトルって何？」（図1）「ビブリオバトルの流れ」「よいプレゼンをするために」等のテキストのページを入れる。



図 1

⑤ Q & A

- ・どんな本を選んでよいかわからない
- ・タイマーについて
- ・5分は長い
- ・イベント型での集客方法や会場の設置方法
- ・子どもにやらせたい
- ・普及委員になりたい…など

⑥ マイ記録（書きこみ式ノート）

ビブリオバトル開催の日時・場所とともに、発表された本や、自分がよいと思った本、チャンプになった本等、書き込めるようにする。

3 造本ほか

- ・四六判、並製、96頁（カラー表紙・本文2色）を何ページか、そのほかはモノクロ。
- ・価格は千円以内。
- ・大人向けのお洒落なものに。
- ・図鑑などに使われている耐久性のある表紙にする。
- ・表紙カバーをあけると投票につかえるような、東京都の予選会でデザイン（図2）されたチャンプ本のイラストを入れる



図 2

（監修）

ビブリオバトル普及委員会として、普及委員からの提案や実践も盛り込む。

（出版時期） 2014年春～

（出版社） 子どもの未来社

参考文献

- 1) 谷口忠大, ビブリオバトル 本を知り人を知る 書評ゲーム, 文春新書 (2013)
- 2) ビブリオバトル普及委員会 ビブリオバトル入門 本を通して人を知る・人を通して本を知る 一般社団法人 情報科学技術協会 (2013)

ビブリオバトル LOD プロジェクト

○常川真央（ビブリオバトル普及委員会）

1 プロジェクト概要

ビブリオバトルは全国行われており、今後ビブリオバトルに関する調査研究が行われることが期待される。ウェブ上には既にイベント開催報告や発表の様様を撮影した動画が大量に存在し、こうした情報が調査研究に使われることが十分考えられる。しかし、現状ウェブ上に存在するビブリオバトルの開催情報は機械が意味を読み取れるように整備されていないため、データの集計や分析に不向きである。そこで、本プロジェクトでは後述する Linked Open Data という考えに基づいてビブリオバトル開催情報のデータセット「ビブリオバトル LOD」を作成する。Linked Open Data とは、部分的に作成されたデータが互いに意味のあるつながりを形成できるように作成された公開データを意味する。

2 ビブリオバトルLODの構造

3.1 全体の構成

ビブリオバトル LOD は「Organizer」「Event」「Game」「Presentation」の4種類のデータによって構成されており、それぞれが図1のようにツリー構造を成している。

3.2 Organizer

Organizer は、開催者・開催団体についてのデータを表し、名前や公式ウェブサイトの URL などの属性を持っている。

3.3 Event

Event は、Organizer が開催したイベントについてのデータを表す。イベントの開催日時や会場などのデータを保持している。

3.4 Game

Game は、Event の中で実施されたビブリオバトルについてのデータである。ビブリオバトルは1つのイベントの中で複数のセッションに分かれていることがあり、そのため Event と Game は区別されている。Game は開始時刻やビブリオバトルのテーマ、そしてどの本がチャンプ本を獲得したのかの情報を記録する。

3.5 Presentation

Presentation は、GAME の中で発表されたプレゼンテーションについてのデータを表し、紹介された本や発表の様様を撮影した動画などの情報を記述する。図1にあるように、Presentation はある1つの Game に所属する。なお、プライバシーなどの問題に抵触する可能性があることから、発表者の情報は現在のところ記述されていない。

4 今後の展望

今後はビブリオバトル LOD の登録データ数を増やすとともに、データを簡単に登録できるような入力支援ツールの開発を目指す。一方で、ビブリオバトル LOD を閲覧・検索したり、データをプログラムから簡単に呼び出せるような活用支援ツールについても開発する予定である。ビブリオバトル LOD プロジェクトでは、データの登録者、上述した支援ツールの開発者、そしてデータを活用して調査研究開発を行う人々を募集中心である。本プロジェクトに関心をお持ちの方は連絡されたい。

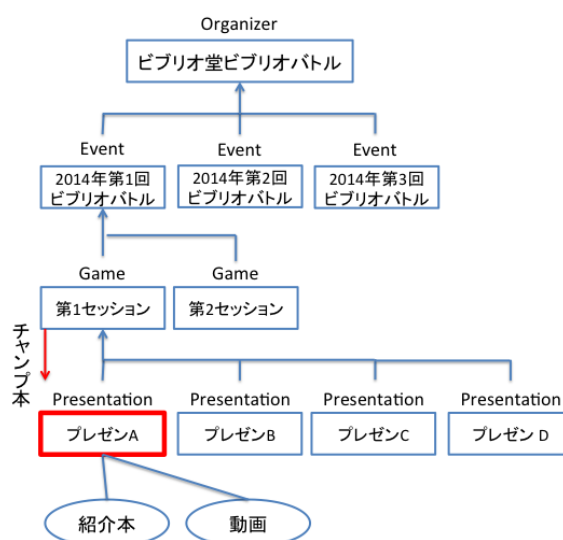


図1 ビブリオバトル LOD のデータモデル

ビブリオバトルにおける聴衆の共感度の分析

○松村 耕平 (立命館大学)、角 康之 (公立はこだて未来大学)
{matsumur, sumi}@acm.org

1 はじめに

ビブリオバトルにおいて、自分の発表がチャンプ本として選ばれるにはどうしたらよいだろうか。投票を得やすい本を選ぶことも 1 つであろうが、聴衆の共感を得るようなプレゼンテーションを行うことも有効だろう。これはビブリオバトルに限らず、様々なプレゼンテーションにおいて重要である。我々はこれまで共感を得るプレゼンテーションの特徴を探るべく、ビブリオバトルを題材に分析してきた¹⁾。本発表においては、それらの分析からわかってきたことを報告する。

2 分析の対象

本研究で分析の対象としたビブリオバトルは 3 名の発表者と 3 名の聴衆の計 6 名を参加者とする。ここで、発表者は自身以外の発表については聴衆となる。すなわち 1 発表あたり 5 名の聴衆をとる。ビブリオバトルは標準的なもので 5 分の発表時間と 3 分の質疑応答から構成され、すべての発表後に参加者全員が投票形式でチャンプ本を選定する。

上記のビブリオバトルを計 7 回行い、それらを分析の対象とした。7 回のビブリオバトルの参加者は大学生 10 名、教職員 2 名の計 12 名であった。すなわち、参加者はそれぞれ数回のビブリオバトルに参加することがあった。

3 分析の方法

聴衆の共感度を計測するための手法として、本研究では、非言語行動の共起と、発表者と聴衆の相互注視に着目する。まず、非言語行動の共起であるが、ビブリオバトル中では、発表者の働きかけに応じて、聴衆が同時に頷いたり、あるいは笑いが起こったりする。このような非言語行動の共起パターンを調べることで聴衆の共感度を推定することができるのではないかと考え、特に頷き、笑い、姿勢変化の 3 行動についてその共起パターンを調査する。一方、発表者と聴衆の相互注視については、相互注視時間が長いほど共感が得られるとの仮説のもと、その調査を行う。

これらの手法で分析するために、ビブリオバトルの様子を 2 台のビデオカメラで撮影すると同時に、光学式モーションキャプチャ装置を用いて、参加者の頭部の動きを計測した(図 1 上)。また、撮影したデータについて、マルチモーダルデータ分析環境である iCorpusStudio²⁾ を用いてアノテーションをつけ、つけられたアノテーションとチャンプ本に選ばれたプレゼンテーションの関係性を調査した(図 1 下)。



図 1 ビブリオバトルの様子と分析環境

4 結果とまとめ

分析として、頷き・笑い・姿勢変化の 3 つの非言語行動について、それが聴衆間で共起した回数を数えあげ、チャンプ本を選ぶための投票における得票数と比較した。その結果、頷きおよび笑いについて多くの共起現象が見られ、その共起回数の多いものが得票数が高い傾向が見られた。具体的には、すべてのビブリオバトルにおいて、頷きの共起回数が最も少ないプレゼンテーションが、得票数も最も少なくなった。非言語行動の共起がプレゼンテーションの良し悪しを決めるひとつの指標となり得ることを示唆する。しかしながら、頷きや笑いの共起回数が最も多くても、最も多くの得票を得るとは限らず、共起の回数はチャンプ本として選ばれるためのパラメータのひとつであると考えられる。

一方、聴衆が発表者に向ける注視行動については、必ずしも相互注視時間が長いものが得票を得るわけではないが、相互注視の時間が短い発表は得票数が少ないという傾向がみられた。このことは、相互注視もプレゼンテーションの評価に用いることができる可能性を示唆する。

参考文献

- 1) K. Matsumura, Y. Sumi and M. Sugiya, Analyzing listeners' empathy by their nonverbal behaviors in Bibliobattle, International Workshop on Multimodality in Multiparty Interaction (MiMI2013). 8 pages (2013)
- 2) Y. Sumi, M. Yano and T. Nishida: Analysis: environment of conversational structure with nonverbal multimodal data, ACM ICMI-MLMI 2010, (2010).

ビブリオバトルにおける発表制限時間の実験的評価

赤池勇磨^{*}，須藤健也[†]，谷口忠大[‡]

ビブリオバトルにおける発表制限時間は5分と定められている [1]。その発表制限時間は長すぎ短すぎないものとして経験的に定められたものであり、その妥当性が実証的に確かめられていなかった。本研究では、異なる発表制限時間がビブリオバトルでの書評者の発話にどのような影響を与えるかについての検証する。また、参加者への感性アンケート調査を行うことで、発表制限時間の変化がもたらす感性的な影響を調査する。本研究の内容は学術論文 [6] において報告を行っており、本発表では当該研究の概要について発表する。

実験としては発表時間を1分、3分、5分、7分、10分としたビブリオバトルを複数回実施し、それぞれにおける書評者の発話内容を全て書き起こしその発話内容に関する分析を行った [5]。また、それぞれの条件において、書評者と視聴者への感性アンケート調査を行い、それぞれの制限時間がその場への参加者に与える心理的影響について分析を行った。

発話分析の結果、1分から7分では比較的頑強に書評本に関して5割から6割程度、書評者自身に関して2割から3割程度の発話が観察される事がわかった。実際の発話内容からも「人を通して本を知る、本を通して人を知る」側面が確認された。また、発話カテゴリー数の点においては1分の場合において極端に少なくなり、ワンフレーズ的なアピールをせざるを得なくなる状況が見られた。

感性アンケートの結果としては、3分から7分の間ではほぼ全ての項目で有意差は見られなかったものの、1分と10分の条件においては、本の内容がわかったか、書評者の考えがわかったか、長く感じたか、制限時間などの点において有意差が見られた。特に、10分と3分、5分の間では、書評者にとっては時間の長さに関する項目において有意差は見られなかったが、視聴者にとっては有意に長く感じられていたという結果が得られ、ビブリオバトルの書評時間が長くなることが書評者よりもむしろ視聴者に負荷をかける様子が観察された。ビブリオバトルは書評者と視聴者双方にとって有意義な場であるべきという視点に立つと、双方に

とっての非対称な心理的影響を考慮に入れることは重要であろう。

本実験の結果、3, 5, 7分の発表制限時間の違いにはほとんど全ての項目で有意な差は生まれなかったが、5分間という従来の制限時間が中間的であり、妥当であろうことも確認された。一方で、本研究で扱ったものは書評内容の質的变化と、参加者がその場で受ける心理的印象のみである。ビブリオバトルの多様な効果には、コミュニティ開発機能、スピーチ能力向上機能、良書探索機能などがある [2]。良書探索機能に関する評価を行った研究には奥らの研究がある [3]。スピーチ能力向上機能に関する事例研究としては山路らの研究がある [4]。これらへの影響に関する検討は今後の課題と言えるだろう。

参考文献

- [1] 谷口忠大, 川上浩司, 片井修: “ビブリオバトル: 書評により媒介される社会的相互作用場の設計”, ヒューマンインタフェース学会論文誌, Vol. 12, No. 4, pp. 427–437 (2010)
- [2] 谷口忠大: 「ビブリオバトル 本を知り人を知る 書評ゲーム」(文春新書), 文藝春秋 (2013)
- [3] 奥健太, 谷口忠大, 赤池勇磨: “推薦システムとしてのビブリオバトルの評価”, ヒューマンインタフェース学会論文誌, Vol. 15, No. 1, pp. 95–106 (2013)
- [4] 山路奈保子, 須藤秀紹, 李セロン: “書評ゲーム「ビブリオバトル」導入の試み —日本語パブリックスピーキング技能育成のために—”, 日本語教育, Vol. 155, pp. 175–188 (2013)
- [5] 鈴木聡志: 「会話分析・ディスコース分析 —ことばの織りなす世界を読み解く(ワードマップ)」, 新曜社 (2007)
- [6] 赤池勇磨, 谷口忠大: “ビブリオバトルにおける発表制限時間のデザイン”, 日本経営工学会論文誌, Vol. 65, No. 3, pp. 157–167 (2014)

^{*}奈良先端科学技術大学院大学

[†]立命館大学大学院

[‡]立命館大学

本と遊ぼう！「子どもビブリオバトル応援団」

○福田 祐里（NPO 法人新座子育てネットワーク）

1 事業概要

当事業は、ビブリオバトルを埼玉県新座市の子どものための新たな読書活動と位置づけ、子どもの読書活動の推進を図ること、また、地域に広くビブリオバトルを普及することで、地域全体の読書活動を活発にすることを目指し、実施したものである。

2 事業の内容

1) フォーラム

「子どもビブリオバトルを応援しよう！」

地域の読書推進に関わる人々に、ビブリオバトルを知り、体験する機会を提供すること、地域のビブリオバトル推進の核となる人材の育成を目的として実施した。当日は、図書館職員や大学教員など、幅広い方面から 26 人が参加した。

ビブリオバトル体験の機会として、普及委員による指導、デモンストレーション、グループでの体験と、段階を踏んでの進行は効果的だった。また、ビブリオバトルの開催プランを建てるワークショップを行い、参加者から具体的なアイデアが多数出された。

終了後のアンケートでは、参加者の満足度が高かったことが示され、自由記述の感想も肯定的だった。ビブリオバトルの魅力を伝えるために、実際に体験する機会を設けることの有効性を示すような記述もみられた。

2) 児童センターでの実施

「お試しか！子どもビブリオバトルin児セン」

子どもたちにとって身近な児童センターで、ビブリオバトルの体験を通して読書の楽しさを発見する機会を提供することを目的として実施した。

子どもたちがビブリオバトルを知る機会として行った、大人がバトルとなるデモンストレーションは効果的であった。また、作戦会議と称して、ビブリオバトルや、普段読む本について子どもたちと話す時間をとり、その後の開催の参考にした。

子どもがバトルとなる「子どもビブリオバトル」の開催時には、参加者を集めるのに大変苦心した。子どもたちへの話題提供や声掛けを工夫して、なんとか参加者を集めることができた。また、当日は楽しい雰囲気を損ねないよう心がけた。

バトルを経験した子どもの数は述べ 129 人で、参加した子どもの感想は肯定的だった。発表された本を図書館で借りたり、友だちと貸し借りをするといった子どもたちの様子からは、ビブリオバトルの体験が次の読書体験につながったことがうかがえた。

3) 児童センター以外の施設での実施

子どもたちだけでなく、保護者にもビブリオバトルを広め、読書習慣づくりにつなげるため、地域子育て支援施設でも、ビブリオバトルを開催した。バトルを経験したのは、乳幼児を子育て中の母親等、のべ 21 人だった。

発表された本は、子どもと一緒に楽しむ絵本が多く、母親ならではの意見や、子育て期の過ごし方のヒントになる情報も語られた。終了後の感想も肯定的で、母親にとっても、ビブリオバトルの楽しさを実感したり、子どもの読書について考えたりする機会になったようだ。

4) 報告会

「本と遊ぼう！子どもビブリオバトル応援団」

地域への取り組みの周知と、今後の活動促進のための意見交換の場づくりを目的として実施した。参加者は、フォーラム参加者やビブリオバトル普及委員等 50 人であった。

当団体の取り組み報告の後、ビブリオバトル普及委員による講演と、パネルディスカッションを行った。講演では、子どもビブリオバトルの事例が紹介されたほか、子どもたちがビブリオバトルをする意義についても語られた。パネルディスカッションでは、ビブリオバトルについてそれぞれの立場からの話題が提供され、会場からも質問が出る等、子どもと読書、ビブリオバトルについてそれぞれが考える、有意義な機会となった。

3 地域との連携・広報活動

事業を進めるにあたり、教育委員会からの後援、図書館からのパネリスト派遣や広報のサポートなど、関係団体からの協力を得た。

また、計 4 回のチラシ配布、HP や Facebook ページなどのネット発信、校長会や教員の研修会へ出向いての宣伝など、広報活動を幅広くおこなった。報告会実施時には、それまでの活動をまとめた広報誌を作成し、参加者に配布を行った。

4 成果と課題・今後に向けて

当事業の成果は、ビブリオバトルの魅力を参加者に伝えることができたこと、次の読書体験につながるような感想・行動を引き出したことである。一方で課題は、参加までのハードルの高さや、ビブリオバトル自体の知名度の低さである。今後、大人も子どもも気軽に参加できるような工夫をしつつ、継続してビブリオバトルを開催することで、課題を解決し、さらなる普及に努めたい。

バトラーがすぐに見つかる！「ビブリオバトル・カード」活用法

○安部 尚登（フィジカル・コミュニケーション・デザイン協会）

1 はじめに

「ビブリオバトルって、面白そう！やってみたい！」そう思っても、なかなかビブリオバトルを開催できない大きな要因は、「バトラー（本の紹介者）が見つからない」ことである。また、ビブリオバトルを継続開催するためには、安定的にバトラーを確保することが、とても大切である。ビブリオバトル・カードは、主催者の「バトラー確保の悩み」を解決できる。コメント欄付き投票用紙であると共に、全ての参加者をバトラーへと誘うプレゼントであり、継続参加と参加者拡大を促すポイントカードにもなる、ビブリオバトル・カードの活用方法について提案する。

2 ビブリオバトル・カードの概要

ビブリオバトル・カード¹⁾は、安部尚登が開発した、ビブリオバトル用のコメント欄付き投票用紙である。紹介された本ごとに、本のタイトルと、紹介を聞いて「面白そうだ」と思った点を2つ、カードにコメントし、最も読みたくなった本についてのカードで投票する。投票が終了した後で、手元に残ったカードについても、それぞれの本の紹介者に渡す。この仕組みにより、紹介者は、全ての聴衆から、自分の紹介本についての、具体的なポジティブ・フィードバックを受けることになり、聴衆は、全ての紹介本に対して、具体的にポジティブな評価を与えることになる。

3 ビブリオバトルカードの効果

3.1 バトラーのモチベーションが向上する

全ての聴衆からポジティブ・フィードバックが与えられることで、バトラーのモチベーションが向上する。

3.2 聴衆の参加意識が向上する

「全ての紹介本について、面白そうな点を2つずつ見つけ、その上で、最も読みたくなった本を1冊選ぶ」という明確なミッションが与えられるので、聴衆の参加意識が向上する。

3.3 紹介内容の振り返りが容易になる

自分の紹介について、全ての聴衆から具体的なフィードバックが得られるので、伝えなかった点が聴衆には評価されたのか、意図せずに評価され

た点が存在するかどうか、等の振り返りが容易になる。

4 バトラー確保のための活用方法の提案

4.1 バトラー全員へのプレゼントとして使う

ビブリオバトル・カードを活用することは、バトラー全員に、「もらってうれしい、ビブリオバトルらしいプレゼント」を用意することである。このことを事前告知してバトラーを募ることで、応募モチベーションの向上が期待できる。

4.2 ポイントカードとして使う

全てのバトラーは、その時の聴衆の数だけ、ビブリオバトル・カードを受け取る。この受け取りカード数をポイント換算し、累積ポイント数に応じたインセンティブを用意すれば、バトラーの継続参加、およびバトラー自身による参加者募集モチベーションの向上が期待できる。

4.3 カードケースを併用する

バトラーは、1回のビブリオバトルごとに、複数枚のビブリオバトル・カードを受け取る。図1のようなカードケース（100均などで安価に売っている）を各バトラーに提供すれば、バトラーの利便性およびカードの記録性が向上して、4.1および4.2の効果を一層高めることが期待できる。



図1: ビブリオバトル・カード(名刺サイズ・両面印刷)とカードケース

参考文献

- 1) <http://www.p-cd.org/2013/11/bb-card.html>

SF 文学振興会の活動- SF とビブリオバトル

○滝直哉(SF 文学振興会)

1 概要

SF文学振興会では、「子供にSFを好きになってもらう活動」の一つとして、2013 年より、ビブリオバトルを実施している。現在行っているビブリオバトルの状況と、課題を、会の活動趣旨との対応の中で整理する。

2 SF 文学振興会とは何者なのか？

SF文学振興会は、子供にSFを好きになってもらうことを目的として活動する団体である。メンバーは社会人のSFファンであり、かつて学校図書館を通じて、SFファンとなっていた経験をもつものが多い。最近の図書館には子供向けのSFの本が少なく、SFが子供に読まれていない* という問題意識から、当初の活動は、学校図書館にSF児童書を寄贈する活動から始まった。

3 「子供に SF を読んでもらうため」の手段としてのビブリオバトル

2013 年のSF大会において実施したパネルディスカッション「子供たちにSF本を」において、本があっても手に取ってくるとは限らない、面白さを伝えないといけないのではないかと、という趣旨の指摘がなされた。これを踏まえ、SFの面白さを伝えていく手段としてビブリオバトルを位置づけ、一般向けに開かれたビブリオバトルを行っていくようになった。

4 ブリオバトルの実績

SF文学振興会の行ってきたビブリオバトルは、大SF文学振興会の行ってきたビブリオバトルは、大きく3つのタイプに分かれる。

a) 月例ビブリオバトル

現在、東京都心部（日比谷）でおこなっている。鉄道アクセスが前提となり、小中学生が単独で参加してくることは現実的にむづかしい。子供を連れてくる人はいるが、定着するまでに至っていない。

b) SFイベントでのビブリオバトル

参加者は参加費を支払って参加登録をおこなったSFファンである。従って、ジャンルとしてのSFが既に好きな

人である。毎回、一定数の参加者はあり今後も続けていきたいが、イベント自体への子供の参加者が絶対的に少ない現状で、どのように展開していくかが課題である。

c) 一般向けイベントでのビブリオバトル

2013 年 11 月におこなわれた一般向け科学イベント「サイエンス・アゴラ」に参加しビブリオバトルを実施した。それ自体かなりの集客力をもつイベントであり、SFとの親和性が高い参加者が多いと想定した。ここでは児童向けのSF本を 20 冊程度持ち込みし、これを利用しての飛び入りバトルを募集したところ、実際に複数のバトル参加があった。

5 今後の課題

子供にSFを好きになってもらうためには、

1) SFの本が手近にある

2) SFの面白さが伝わる

という 2 つがセットで必要である、というのはSF文学振興会の認識である。面白さを伝えたい相手である子供のいるところ、子供の集まるイベントへのビブリオバトルでの参画を増やすことが課題である。

また、「ビブリオバトルでSFを紹介している大人が愉しんでいるか」ということを見せることが重要ではないか、というのは、現在感じているもう一つの課題である。

*子供がSFを読まなくなっているという事実を示す数値的な資料は確認できていない。ただ、1980 年代以前複数の出版社から発行されていた児童向けのSFのシリーズが 2000 年代以降は、一部を除きほとんど入手困難になってきていること、また、過去に実施したイベントにおいて、出版、図書館関係者から「SFでは売れない」「SFだと読まれないからと購入してもらえない」という声があったという事実からそうに判断している。

参考文献

- 1) 第 52 回日本 SF 大会 企画「子供たちに SF 本を」
<http://www.koicon.com/ja/program/sub/p5028.html>

事例紹介！「少人数・小規模」ビブリオバトル ～家族でカフェでオンラインで～

○高橋 一彰（放送大学）

1. はじめに

ビブリオバトルは現在、全国で開催されており、その開催スタイルは多種多様である。中でも、書店、図書館などの大人数形式で行われる「イベント型」の事例が数多く報告されている。筆者も大学生大会の「ビブリオバトル首都決戦」でビブリオバトルを知った。しかし、大人数形式で行われるビブリオバトルに注目が集まると、世間は「大人数で行わなければビブリオバトルではない」と一定の価値観でビブリオバトルが認知される可能性がある」と筆者は懸念を抱いた。そこで、筆者は2013年5月頃から、「いつでもどこでも楽しむことができる」ビブリオバトルの開拓を目指し、「少人数・小規模」でおこなうビブリオバトルを数多く実践した。今回、世の中の誰もがビブリオバトルを手軽に楽しめることを目標とした「少人数・小規模」ビブリオバトルの魅力と期待される効果を、実践例を取り上げながら紹介する。

2. 開催したビブリオバトルのスタイル

- ① 家族でビブリオバトル
- ② カフェや居酒屋などの小さなコミュニティ
- ③ オンライン・ビブリオバトル

3. 「少人数・小規模」メリットと課題 「メリット」

- ・いつでもどこでもできる！
- ・すぐできて、すぐ終わる！
- ・参加者同士の距離が近い！

「課題」

- ・大人数形式のような盛りあがりがない。
- ・「大学生大会」のような利益がない。

4. 「少人数・小規模」を盛り上げる工夫

- ① チャンプ本を決めるゲームではないことを強調！
- ② ゲーム終了後、投票した本の理由を答える！
- ③ チャンプ本獲得者に副賞(賞品)贈呈！
- ④ トレンドの確立(ビブリオお兄さんなど)

5. まとめ

ビブリオバトルは大学生大会などの「大人数形式」によるイベント型が多く取り上げられているが、それだけがすべてではない。そして、チャンプ本を獲得する(勝つこと)ゲームであるが、本プログラムは、ビブリオバトルをより楽しむことを目的に作成した。もともとビブリオバトルは京都大学の研究室で「少人数形式」で開催されていた。ビブリオバトルに限らず、どんなものでも、人数や規模が大きいものの方が良いものとは限らない。むしろ、量よりも質が大切であると筆者は感じる。本プログラムをきっかけに、ビブリオバトル未開催の地域や、これからビブリオバトルを始める方々に、参考にしていただけたら筆者はとても嬉しく思う。ビブリオバトルが浸透していない未開催地域で普及するのは始めは苦労することが多いと思うが、小さなことを続けていくことが大きな近道であると筆者は思うので、主催者自身がビブリオバトルを楽しみながら、定期開催を地道にコツコツと続けて欲しいことが筆者の切なる願いだ。



図1: ビデオチャットのハングアウトを使用した
「オンライン・ビブリオバトル」の様子
(2013年3月5日実施)

<http://m.youtube.com/watch?v=Hjs6xx6SpeA>

図書館が変わる？！ビブリオバトルを活用して 大学図書館のブランディングと学修支援をやってみました

○坂田 絵里奈・原田 佳子（九州国際大学図書館）

1 概要

本を読み、紹介することの楽しさ、他者とのコミュニケーションツールだけでなく、ビブリオバトルが持つ様々な効果を教職協働で引き出し、ビブリオバトルという一つのコンテンツを図書館のブランディングや学修支援のツールとして活用した事例を報告する。

2 はじめに

図書館長、図書館スタッフ、学生スタッフ有志で練習会を行った。授業の一環として取り入れることも視野に入れ、検討を重ねた。図書館ガイダンスの案内と同時にビブリオバトルという新しい取り組みの導入案を一緒に提案した。数名の教員から反応があり、図書館ガイダンスとの連動を持たせるためミーティングを重ねた。また、学生にどんなものか体験してもらうため、図書館長や図書館スタッフ、学生スタッフが授業内でビブリオバトルのデモンストレーションを行った。

3 取り組み内容

1年生ゼミで4クラス、2年生ゼミで1クラス、図書館学課程クラスで実施した。デモンストレーション、本の探し方、ワークシート（九州国際大学図書館作成）の作成、グループ内の練習等、90分×5～6回を通じてビブリオバトルにチャレンジした。また、参加者には一行ホメシートを記入してもらい、能動的な参加を促すような仕組みを持たせている。



イベントとしては、オープンキャンパスの企画の一つとして学生主体で開催し、来場した高校生や保護者の方にチャンプ本を選んでもらった。さらに、地域活性化のイベントとして、近隣の公共図書館や地域づくり団体と協力して開催した。（後に別のイベントでの開催や市内の公共図書館でのビブリオバトル初開催へとつながった。）

4 結果と課題

入館者数や貸出冊数は、表の通り微増しており、取り組みの成果が増加の一因となっていることが推測される。

	2012年度	2013年度
入館者数	68,557人	69,046人
貸出冊数	6,849冊	7,230冊

また、新聞でゼミでのビブリオバトルの活用が紹介され、大学広報の一助となった。

今後の課題としては、図書館として学修を支援する機能を一層強化しながら、人と資料、人と人をつなぐハブ的存在としての機能を高めたい。また、ビブリオバトルを活用した授業デザインの提案を全学的な取り組みとして認知されるように働きかけたい（2014年度は学部によってはシラバスに掲載された）。手探りの中で始めた、ビブリオバトルを活用した授業デザインをより有効なものとするため、「教職協働で作る学修支援」をテーマに、2014年度私立大学図書館協会研究助成に応募し、採択され、現在研究活動中である。

参考文献

- 1) 知的書評合戦ビブリオバトル公式ウェブサイト <http://www.bibliobattle.jp/>
- 2) 毎日新聞（西部版）2013. 9. 14 夕刊, 7面
- 3) ビブリオバトル普及委員会, ビブリオバトル入門, 情報科学技術協会(2013)
- 4) 副島雄児他, 本を通して仲間を知る: コアセミナーでの試み, 九州大学附属図書館研究開発室年報 2012/2013, 34/43(2013)

ビブリオバトルの授業を創ろう！

～徳島大学附属図書館の事例～

○佐々木 奈三江（徳島大学附属図書館）

1 徳島のビブリオバトル事情

徳島では、2013年に徳島県内の大学生と教職員有志が「阿波ビブリオバトルサポーター」（以下「サポーター」）を組織し、徳島県下でのビブリオバトル推進をめざして活動を行っている。この活動の素地は2つあり、一つは徳島大学附属図書館で2010年に結成した、学生を中心とした団体「ライブラリー・ワークショップ（以下LW）」である。LWでは、書評プレゼンイベント「私のオススメの1冊」を開催していた。もう一つは2012年から、授業やゼミでビブリオバトルを導入していた教員や図書館職員の存在である。「サポーター」はそれらに関わった者たちを中心として結成された。結成後は学生主導でビブリオバトルを実施し、徳島初の公募型イベント実施、「ビブリオバトル首都決戦」への挑戦、首都決戦での特別賞受賞と成果を挙げてきた。

2 「ビブリオバトル」授業開講の経緯

ビブリオバトルを実施する中で、教職員が注目したのはその教育的効果である。ビブリオバトルでは、本を読む機会の創出、本を読み解く力やプレゼン能力の育成はもちろんのこと、ビブリオバトルイベントの企画・運営を行うことで社会人基礎力の養成も可能となる。そういった効果があるにも関わらず、積極的にビブリオバトルに参加する学生は少ない。そこで、ビブリオバトルに触れるきっかけとなるよう、2014年より大学1・2年生向けの全学共通教育授業として「読書コミュニケーションへのいざない」（以下「読みざ」）を開講した。

3 「読書コミュニケーションへのいざない」とは

「読みざ」は、全学共通教育のカリキュラムのうち「さまざまな体験を通して人間力や社会性を身につける科目」として開講される「社会性形成科目群」に含まれる。さらに課題発見・グループワークを行う「共創型学習」に分類され、前期7名、後期6名が受講した。「読みざ」の授業のねらいは「大学生活の中に読書活動を習慣化し、読書を通じた人との出会いによって読書のコミュニケーションを構築していくこと、そして多様な本との出会いにより教養を深め、多様な価値観に触れること」である。

3.1 教職員同士のコラボレーション

「読みざ」は、複数の異分野の教員と図書館職員が参加してそれぞれの立場から読書にまつわる講義を行うことに特徴がある。ドイツ文学の教員はカフェで読書会（三色ボールペン方式）を行った。また、分子進化発生生物学の教員はCritical Readingで論理的に文章を読むことを、日本近現代文学の教員はカルチュラル・スタディーズの手法を用いて本の深読みを行った。著者は、図書館実習とブックログを利用したソーシャル・リーディング、ビブリオバトルの回を分担して実施した。

3.2 ビブリオバトルの実践

ビブリオバトルの実践にあたっては、徐々にビブリオバトルに慣れていくよう、次のような順序で5回実施した。①「サポーター」によるデモンストレーション②ブックログで書評を書いた後にビブリオバトル③戦略ミーティング④好きな本でビブリオバトル⑤テーマ「旅」でのビブリオバトル⑥最終決戦（「サポーター」との対決）。

なお、参加者のモチベーション向上・敗者へのフォロー・ディスカッションを誘発するツールとして、いずれの回も「ビブリオバトルカード」¹⁾を使用した。

3.3 成果と課題

「読みざ」の成果として、ビブリオバトルの活性化があげられる。授業外で開催されたビブリオバトルに受講生が4名参加し、その内1名は「サポーター」に加入した。さらに、教員や学生との交流も深まるなど、読書によるコミュニケーションの構築はある程度達成できたといえる。一方、読書の習慣ができたか、「多様な価値観に触れる」ような読書ができたか、などは検証できなかった。ビブリオバトルを導入した九州大学の授業²⁾ではアンケート調査を行って様々な視点から効果検証を行っている。この報告を参考に、後期の「読みざ」では本の読み方、プレゼンへの意識の変化などについて効果検証を行う予定である。

参考文献

- 1) <http://www.p-cd.org/2013/11/bb-card.html>
- 2) 副島雄児ほか、本を通して仲間を知る：コアセミナーでの試み、九州大学附属図書館研究開発室年報、2012/2012, 35/44（2013）

生徒による主体的な運営をめざして

○弓削田恵理（埼玉県立坂戸高等学校）

1. はじめに

埼玉県では 2014 年度から「進学力向上パートナーシップ事業」と題し、中堅進学校向け事業を行っている。本校もその一環としてビブリオバトルに取り組むことになった。参加校は、年間を通して総合的な学習の時間・LHR等でビブリオバトルを行い、埼玉県教育委員会が主催する 10 月のビブリオバトル埼玉県大会に代表生徒を出場させることを目指す。1 学年 9 クラス 40 人学級。

2. 実践計画・概要

新一学年での計画的な指導を行っている。

時期	実施内容	補足
3 月	新入生説明会	読書レポートを課す
4 月	オリエンテーション	前年度大会の視聴・教員による試演
	委員発足	クラス準備
	クラスビブリオバトル	委員主導による小グループでの実践
7 月	夏季課題	文章化せず
9 月	第 1 回クラスビブリオバトル	各グループでのチャンプ決め
	第 2 回クラスビブリオバトル	各クラスのチャンプ決め
	学年決戦大会	学年代表を決め投票
10 月	埼玉県大会	代表生徒 2 名出場
12 月	冬季課題	文章化せず
1 月	クラスビブリオバトル	委員主導による小グループでの実践
2 月	講演会	普及委員による
	アンケート実施	新年度に向けて

3. 取り組みにあたって

3.1. ビブリオ委員の設置

実施はクラス毎のため、クラスにビブリオ委員を配置し、クラス運営を彼らに任せた。委員は司会原稿・座席表を作成し、クラス管理に徹底をしたため、当日は担任が指導することがない体制となった。第 2 回、3 回と重ねるうちに委員の運営もスムーズとなり、学年決戦も委員が全て行った。

3.2. 生徒による小グループ運営

発表は小グループ毎（6~7 人×6 グループ）だが、委員による一斉指導ではなく、各グループ内で司会・タイムキーパーを任命しての実施とした。

3.3. 2 会場での学年決戦

学年決戦は格技場の 1 階・2 階の 2 箇所を用いて行った。これは HR 代表者と投票者のクラスが被らないようにするためであり、また全 9 クラスの代表が 1 度にバトルをするのは効果的ではないと判断したためである。開票結果が適度に分散し、発表順によって損をした印象は受けなかった。

4. 問題点と対処

4.1. 口演時間の 5 : 00 の徹底

グループでの活動を全て生徒に任せたところ、5 分の口演時間を使い切らずに勝手に短縮した班があったため、厳重に注意した。

4.2. レポート提出の弊害、レポート廃止

1 学期のバトルの際には、新入生課題として「読書レポート」を提出させたため、当日は注意したにも関わらず、レポートを机に出しながら発表したり、暗記をして思い出そうとしながら発表をしたり、思い出せずに言葉が詰まったりしている生徒が見受けられた。そのため、2 学期以降はレポート提出を廃止し、レジュメの持ち込みを取り締まり、机上には本だけを置く指導をした。

4.3. 教員と生徒の評価の違い

多数の先生から「教員と生徒で評価が違う」という指摘を受けた。教員は論理的に発表を評価するが、生徒はパフォーマンス性の高い発表、いわば「本」よりも「発表者」を評価する傾向にある。

5. おわりに ~担任としてのクラスづくり~

新入生担任として、また校内の係として、一連の取り組みを通して筆者が感じたことは、新入生に対するビブリオバトル実施は「本を通して人を知る」の銘文通り、相手を知る有効手段になるということだ。お互いの読書傾向を知り、想いを伝え合う活動は、新学期に円滑な友人関係を育むための、良き機会となった。また、司会やタイムキーパーの役割を生徒が担うことで、初対面同士が協力し合うことになり、クラスづくりとして大変有効であった。

さらに、「新しい事業を導入すること」に対して、後ろ向きな姿勢が多い教職現場において、ビブリオバトルの生徒による主体的な運営は、教員に余計な手間をかけさせることが少ないため、好評であり、生徒の運営力を評価してくれる先生も多数いた。

参考文献なし

高等学校教育における多様なビブリオバトル活用手法の検討

一情報科・洋書での実践効果一

○小野 永貴（千葉大学アカデミック・リンク・センター）

高司 陽子（豊島岡女子学園中学校高等学校）

1 はじめに

中学校・高等学校新学習指導要領では言語活動の充実が重視され、その一環として、ビブリオバトルを導入する学校も増加してきた。一方で、学校でのビブリオバトル活用に関する実践報告は、前田による国語科授業での事例¹⁾や、木下による学校図書館での事例²⁾はあるものの、国語科や学校図書館以外の多様な校内場면을対象とした議論は極めて少ない。そこで本稿では、筆者らが各々の勤務校（小野は前任校）で実践した「情報科」および「洋書」を対象とする2事例を報告し、活用手法やその効果について検討を行いたい。

2 お茶の水女子大学附属高等学校における情報科ビブリオバトルの実践

お茶の水女子大学附属高等学校では、平成24年度から平成25年度にかけ、情報科の必修科目「情報A」「社会と情報」の授業内で、ビブリオバトルの活用を試みた。「情報の表現や伝達」に関する単元における、PCを用いたプレゼンテーション実習を行う前段階の、口頭発表の導入題材としての位置付けである。発表学習に嫌悪感をもつ生徒も多い中、ゲームを通して発表行為に対する苦手意識を下げ、相互に思考をアウトプットすることの楽しさを体感する“きっかけ”となることを目的とした。それと同時に、質疑や投票を通して聴衆としての姿勢を認識したり、発表の改善点を自主的に振り返ることで、結果的にプレゼンテーション能力向上に繋がることも期待された。

実施形態は、クラス内を5～6人程度の班にわけ、班ごとに公式ルールに準拠して実施した。発表前に、工夫したい点や目標のみプリントに記してもらい、発表でそれを達成できたかどうか、終了後に各自で自己評価をしてもらった。なお、最後は班ごとのチャンプ本獲得者の栄誉を称えるのみで、クラス全体で決勝戦的なことは行っていない。

プリントに記された自己評価および感想を、記述内容別に分類して集計したところ、「楽しかった・熱く発表できた・ぜひ読みたくなった・またやりたい」といったポジティブ意見を、約半数近くの生徒が明記していた。また、緊張や準備不足による失敗等のネガティブ意見も一部散見されたが、多くの生徒はその失敗要因を具体的に分析し、視線や時間配分などの改善点を記述しており、次回以降のプレゼンテーション機会に役立てられる自己反省点を発見できたと予測される。

3 豊島岡女子学園中学校高等学校における洋書ビブリオバトルの実践

豊島岡女子学園中学校高等学校では毎年、読書週間の時期に「ネイティブの先生と洋書についてお話ししよう!」という企画を行っている。3年目となる今年は、教員のほうから「洋書でビブリオバトルをやってみたらどうか?」とのご提案を頂き、初めての試みとなった。校内ではポスター掲示、図書委員からのクラスでのアナウンスをし、参加者を募集。実際は司書教諭が、狙い目の生徒にアタックし、新たな企画に挑戦する機会とした。

当日は、高校1年生1名、高校2年生1名、中学3年生1名、ネイティブ教員2名の5名というかなりアットホームな雰囲気の中での活動となった。しかし興味のある生徒は多く見学者として来た者が多い。特に中学1.2年生が多かったため、今後の活躍が楽しみである。

今回の紹介された本は「Frozen」教員①、「Harry Potter」教員②、「Frog and Toad All Year」高1、「The Hunger Games」高2、「Rebecca」中3、でチャンプ本は「Rebecca」となり、最年少学年が選ばれたことは、今回のバトルの興味深いところであろう。反省には「楽しかった。英語もとても上手で驚いた。もっと洋書を沢山読んでみたくなった。」との感想があり、バトラーへの活発な質疑応答には、今後の成長が大いに期待される初回となった。

4 おわりに

両校とも大規模大会に生徒が出場しているが、校内予選は別途開催していることに留意されたい。両校に共通するのは、ビブリオバトルを教育上の文脈に位置づけつつも、ゲームの趣旨通り、楽しさや意欲を自然と誘発することに成功している点である。このように、活用手法次第では、国語科や学校図書館以外の場面でもビブリオバトルは効果を発揮する可能性を持つと考えられ、今後は多様な実践報告が共有されることに期待したい。

参考文献

- 1) 前田由紀, ビブリオバトルがつなぐ生徒の知とコミュニケーション, 学校図書館, (753), 33/35 (2013)
- 2) 木下通子, ビブリオバトルと学校図書館, 図書館雑誌, 108 (8), 530/531 (2014)

中学生とおとなでビブリオバトル！

○東 雅宏（白山市立松任中学校PTA）

1 はじめに

石川県白山市立松任中学校（生徒数 856 人、PTA 会員数 837 人）では、平成 25 年度から PTA と生徒会の主催でビブリオバトルを開催している。中学生が日頃から考えていることや思いを保護者として共有していきたいという PTA の思いを形にするため、生徒会と事前に協議し場を設定することとした。また生徒会からも、畏まらずに気楽な中で話をしたいという要望が出た。その結果、生徒と保護者や生徒同士の交流を促すため、「中学生とおとなでビブリオバトル！」（以下、「ビブリオバトル」という）の企画が動き出した。

今回、これまでに 4 回開催されているこの 2 年間の取り組みを報告する。

2 取り組みの概要

このビブリオバトルでは、生徒と保護者の双方から本の紹介者を出すこととし、観戦は、参加自由としている。中学校では生徒会が中心となって取り組み始めたが、回数を重ねる中で、校内の生徒による組織である図書委員会も積極的に関わってきている。ルールは、ビブリオバトル公式ルールのとおりとし、1 人 5 分間で本の紹介を行っている。各回でテーマは設定せず、発表者は自分の「オススメの本」として本の紹介をしている。

2.1 これまでの開催

平成 25 年度から始めたビブリオバトルは、これまでに 4 回開催されている。生徒会の役員任期が半年であることに合わせて、1 年に 2 回のペースとなっている。放課後時間帯の開催とし、各回とも約 1 時間で行っている。

発表者は、生徒と保護者双方から募っている。開催にあたり、各教室に案内チラシを貼ったり、図書館でビブリオバトルのコーナーを設けて認知度を高めている。第 1 回の開催では、生徒、保護者、教職員合わせて約 30 人であったが、第 2 回では約 40 人、今年度に入って第 3 回、第 4 回ではそれぞれ約 60 人の参加となっている。

生徒会や図書委員会に所属している生徒だけではなく、本に興味のある生徒、「友達が本の紹介するから」参加する生徒、他校の教職員や保護者も参加するようになってきている。これまでの開催概要は表 1、開催の様子は図 1 のとおり。

さらに、今夏には図書委員会主催での校内ビブ

リオバトルも開催された。生徒自身による企画運営のため「ミニ・ビブリオバトル」として開催されたが、生徒の呼びかけにより生徒 4 人、教職員 2 人の発表者で行われている。

第 1 回	開催日	平成 25 年 7 月 16 日（火）
	参加者	約 30 人
	発表者	5 人（中学生 3 人、おとな 2 人）
第 2 回	開催日	平成 25 年 10 月 30 日（水）
	参加者	約 40 人
	発表者	5 人（中学生 3 人、おとな 2 人）
第 3 回	開催日	平成 26 年 5 月 23 日（金）
	参加者	約 60 人
	発表者	5 人（中学生 3 人、おとな 2 人）
第 4 回	開催日	平成 26 年 10 月 23 日（木）
	参加者	約 60 人
	発表者	6 人（中学生 3 人、おとな 3 人）

表 1：これまでの開催概要



図 1：ビブリオバトルの様子

3 開催を通して

これまでの開催を通して、生徒からは「自分がふだん読まないような内容の本が紹介されて、読んでみたい本を見つけることができた」「自分もいろいろな本を読んでいきたいし紹介したい」といった、本を通して他と交流する感想が多く出ている。保護者からも「生徒さんが伝えたいことがしっかり伝わってきました」「大人と子どもが同じ目線でバトル出来てすばらしい」といった、中学生との交流を楽しむ感想が寄せられている。

ビブリオバトルを通して、生徒と保護者の交流、生徒同士の交流が生まれてきており、校内でのさらなる発展と他校への広がり期待している。

春女 in ビブリオバトル・ひまわり杯

○木下 通子（埼玉県立春日部女子高校主任司書）

1 はじめに

埼玉県立春日部女子高校は今年度、「学校進学力パートナーシップ推進事業」の推進校に指定され、思考力向上プログラムの中に組み込まれたビブリオバトルを校内で積極的に行うことになった。今回のポスター発表では、学年全体で行ったビブリオバトル、国語科とコラボレーションして行ったビブリオバトル、図書委員会が運営して行ったビブリオバトルなどの具体的な様子を生徒の手作りポスターでお伝えしたい。

2 入学直後のビブリオバトル

入学前の入学許可候補者説明会で入学許可候補者（新一年生）にビブリオバトルについて説明をし、入学式直後の4月9・10日で1年生全クラスでワークショップ形式のビブリオバトルを行った。ビブリオバトルの運営については、ビブリオバトル普及委員である文教大学准教授 平正人先生とゼミの学生さんに推進事業の予算から謝礼を払いご協力いただいた。この時点でクラス内で6人のバトラーを選び、4月14日から行われた進学合宿のクラスレクの時間でクラス代表者を決め、進学合宿最終日に決勝大会を行った。決勝大会は大いに盛り上がり、生徒たちにも好評だった。

1年生全員にアンケートをとったところ、「友だち作りに役立った」「本を読んでみようという気になった」という答えが多く集まり、また、挑戦したいと回答した生徒も6割を超えた。

3 2年生ビブリオバトル

1年生のビブリオバトルが好評だったので、2年生も学年全体でビブリオバトルに取り組むことになった。が、時間の確保が難しく、国語科の先生のご厚意で授業を1時間いただき、ビブリオバトルを行うことになった。1年生よりもモチベーションが低く、すべての子が本選びも含めてしっかり準備できたわけではなかったが、その後、ビブリオバトルに積極的に挑戦する生徒も生まれた。また、見学された担任の先生から、「ふだんクラスではおとなしいけれど、本の紹介だと積極的！」

と言われた事例もあった。この会の運営は、国語科の先生と司書で行い、国語科の先生方も生徒が紹介した本に興味をもたれた。また、この事例が形をかえて、2学期に「POPでビブリオバトル」という取り組みを行った。

4 ビブリオバトル「ひまわり杯」

1. 2年生が学年全体でビブリオバトルに挑戦した後、ビブリオバトル大会「ひまわり杯」を行った。これには3年生にも声をかけ、バトラーとして参戦してもらった。司書の発行する「図書館だより」と校内にポスターを貼る形で告知を行った。

6月21日（土）には、おもに図書委員が中心として参加し、図書館でワークショップ形式のビブリオバトルを行い、グループで勝ち上がったバトラーで決勝戦を行う形式の会を行った。

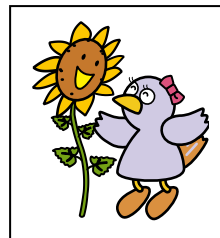
7月18日（金）には、学力向上委員主催で、ひまわり会館という別棟を押さえ、ビブリオタイマーも設置、聴衆者も呼び込んで本格的な大会を開いた。

9月6日（土）には本校の文化祭イベントの一つとして、ビブリオバトルを開催した。ここには隣の春日部高校の男子生徒2名も参加し、本校の生徒3名とあわせて5名のバトラーでビブリオバトルを行った。一般来場者も聴衆者となった。

5 今後の取り組み

春日部市内5校の図書委員研修交流会でビブリオバトルを行ったり、埼玉県内ではビブリオバトルの取り組みがどんどん広がりを見せている。

図書館でもビブリオバトルで紹介された本を展示し、それが借りられるという相乗効果があった。来年度もこの取り組みを精力的に続けていきたい。





白桜館ブックメーヴェ大活躍！を仕組み

○北 野 玲 子（西宮市立高須中学校）

1 「白桜館」と「読書感想画」

「白桜館」は本校図書館の館号である。2012年に転任して、初めて図書館担当になった時、窓外に広がる白い大島桜の並木に感激して名づけた。しかし校内の辺鄙な場所にある上に常時暗幕を閉めた真っ暗で閉鎖的な館内には辟易して「図書館大改造」に着手した。PC20台を常設し、書架の大移動を「BOOK・MOWE＝本校生徒図書ボランティア」を中心に、「BOOK・CHEF＝本校保護者図書ボランティア」の協力も得て敢行した。丸1年を要する大仕事だった。3年目の今年は技術家庭科担当の強みを生かして集光アクリル板を曲げ加工して標示(サイン)を手作りするなど生徒と共に「白桜館素敵化計画」の仕上げを行っている。

また「読書感想画」指導では2002年(多分)から毎年15年連続で兵庫県コンクールに進出させ、全国中央コンクールにも入賞歴12年の実績を挙げている。実は3回転勤する中で3回、県大会で止まった年があるので全国15年連続入賞と言えないのが惜しいが、転勤するたび毎回ゼロから指導を始めて得た成果なので、これは快挙であろう。

2 ビブリオバトルとの出会い

2012年12月、西宮市立北口図書館の第1回ビブリオバトルを観戦した。バトラーの1人が教えずで吃驚。「学会タイマー」ソフトを貰って帰った。翌年1月の第2回には生徒有志で観戦に出かけ、彼等の感想から「中学生のためのバトルを開催するなら自館で」と考えた。同2013年8月、京都で全国学校図書館研究大会があり、阪大の中村准教授のワークショップに参加して「ビブリオタイマー」ソフトを貰って帰った。…「研究会に行く時はUSBメモリ携帯で」というのは私の常識なのです。お土産にソフトを頂戴出来る確率が高い。

3 白桜館「Step-Upビブリオバトル」計画

本校でも「朝読」をしているが、誰かが買った文庫本を廻し読みしているのが実態で「読破Card、白桜館Book-Theatre、放送朝読、TV朝読、出前Book-Talk」など様々に読書推進を仕組みでも空振りして「白桜館」の入館者数も貸出冊数も伸び悩んでいた。これでは呼びかけるだけでは自由意志でバトラーに立候補したり、観戦しに来る生徒は皆無に違いない。いきなりやっても無理なら、「ビブリオバトルが愉しめる生徒」に育てるために段階的に指導していくのが上策だろう。

3.1 「ためす」＝Step!

夏季課題に「読書感想画・自由読書部門」を出す。9月、クラス毎に「読書感想画 de ビブリオバトル」を行う。発表が苦手なら紙芝居の要領で「読書感想画」を教卓に立て(顔を隠せる)、裏に書く「作画感想」を棒読みすれば良い。発表の巧拙ではなく「一番読みたくなった本」に投票するわけだから気はラクだ。勿論、読書感想画なんか使わず好きな本でバトルしても良い。こうして高須中生は全員、バトラー体験をお試し済みとなる。

3.2 「たのしむ」＝Step!!

来賓や保護者、教師も共に愉しむ目的で2013年10月、文化活動発表会ステージ発表で「読書感想画・指定図書 de 全校ビブリオバトル擬き」を開催した。初回は白桜館の常連がBOOK・MOWEとして大勢参加し、5チームに分かれてパワポや寸劇を交えて1分間のプレゼンを行った。給食準備中・昼休みの開館時間帯に数回打ち合わせただけであとは各チームに任せ、彼等はよくやった。それを見て「どの指定図書を読むか決めた」生徒が描いた読書感想画が、兵庫県コンクール選出枠2枠を本校が独占して中央コンクールに進出し、2人ともが「奨励賞」に輝く成果につながった。

2014年の「第2回」では1チーム2人に絞った。スカレシアやラスメニーナスなど観戦者が知らない画像はパワポに載せ、Wolfgang Amadeus Mozart作曲「12 Variations on “Ah, vous dirai-je, Maman.”」は、本校特別支援学級でも導入している「J-Harp」でサワリを演奏したりもしてよく工夫していた。

3.3 「たかめる」＝Step!!!

「ホンモノ」を知るため2013年11月「ひょうご子ども読書活動推進フォーラム阪神地区中高生部門予選」に応援団を含め10人を率いて参戦した。全員が高校生に惨敗したが、その縁で西宮今津高校の総合学科発表会の観戦にも出かけた。2014年阪神地区フォーラムにも7人で参戦した。手も声も震え、しどろもどろでも温かい拍手を頂いた。

4 ビブリオバトルが愉しめる生徒へ

公立中学校で、素地のない状態からビブリオバトル～知的書評合戦が愉しめる生徒に育てる実践として「白桜館 Step-Up ビブリオバトル」の取り組みは効果があると言える。…will-be-continued!

山本弘『翼を持つ少女 BISビブリオバトル部』

単行本 2014 年 12 月 22 日発売！

○小浜 徹也（東京創元社 編集部）



著者の山本弘さんは長らく、TRPG（テーブルトーク・ロール・プレイング・ゲーム）を基にしたファンタジー小説と、『アイの物語』や『MM9』（2010 年に連続TVドラマ化されました）といったSF小説を発表してこられた作家です。

その山本さんが昨年の夏にビブリオバトルに出会い、書き上げたのが、今回単行本で発売される“日本初の本格的ビブリオバトル青春小説”『翼を持つ少女 BISビブリオバトル部』¹⁾です（本体価格 1900 円＋税）。

2014 年 2 月から 8 月まで、東京創元社のウェブマガジン〈Webミステリーズ！〉に連載されました²⁾。現在も続刊となる第2部『幽霊なんて怖くない』が連載中です（『翼を持つ少女』連載第1回は、こちらのアドレスで³⁾PCやスマートホンで無料でお読みいただけます）。

主人公はSF小説が大好きな、でもクラスではまったく目立たない、15 歳の内気な少女、伏木空（ふしき・

そら）。その彼女が、現実を描くノンフィクションが好きでSFに理解を示さない同級生、埋火武人（うずみび・たけと）に誘われてビブリオバトル部に入部することになります。そして、部活のビブリオバトルでSF小説を紹介するうち、空には一つの目的が生まれます。

「埋火さんに、SFを好きと言わせたい！」

小説中ではビブリオバトルが3回行われます。紹介される本は、博識な山本さんならではの、本当に多種多様、ビブリオバトル・シーンも臨場感に溢れています。

タイトルにある「BIS」は、舞台となる中高一貫校、美心国際学園（Bishin International School）の略称です。外国人や他国人と日本人との間に生まれた生徒も多く通う、自由な校風の有名校という設定。

カバーイラストと登場部員のデザインは、いま大注目の新進、pomodorosa（ポモドローサ）さんにお描きいただきました。小説中でもキャラの立ってる部員たちですが、こうして絵になるとさらに個性が際立ちます。

ぜひお読みいただき、気に入っていただけたら、ご友人への紹介を、是非よろしく願いいたします。

- 1) 山本弘, 翼を持つ少女 BISビブリオバトル部, 東京創元社 (2014)
- 2) <http://www.webmysteries.jp/special/biblio-01.html>
- 3) <https://viewer.yondemill.jp/?cid=3251>

本書の登場人物



きくち あすか
菊地明日香

こがね い
小金井ミナー

こうみず ぎん
興水 銀

あづち さとし
安土 聡

うずみび たけと
埋火武人

ふしき そら
伏木 空

天満橋ビブリオバトルの取り組み

○池内 祥見（大阪大学キャンパスデザイン室）

1 天満橋ビブリオバトルについて

天満橋ビブリオバトルは2010年11月にスタートし、2014年12月で第50回を数えます。主催メンバーは京都大学での創始メンバーの一人である吉野英知、ビブリオバトルが全国に広がるきっかけの一つとなった大阪大学のSciencethroughのOBである中津壮人、そして初めて書店内で開催された紀伊國屋書店本町店でのビブリオバトルにて発表で参加した池内祥見の3人です。

天満橋ビブリオバトルでは、継続のための様々な工夫を行ってきています。また、関西におけるの普及活動に積極的に関わってきています。この工夫と普及活動についてご紹介したいと思います。

2 どうやって50回続けてきたか

開催当初から変わらず、毎月第3水曜日の開催を原則として続けていますが、継続する中で下記のような様々な工夫をしています。

2.1 参加者への考え方

“仕事帰りの大人”をメインの参加者層としてイメージしながら、参加メンバーを固定し過ぎず、毎回一定の入れ替わりがある状態を健全と考えて、運営をしています。この1年間の実績だと、参加者は毎回20~35人ほどで、一定数は初参加の方がいらっしゃいます。

2.2 運営・進行の工夫

主催者も全員社会人のため、急な欠席が発生する場合もあります。そのため主催メンバーや参加者の一部も含め、司会進行等ができる人員を複数確保しています。また、“はじめて参加の人”への敷居を高くしないように、開始前の説明などを必ず丁寧に行うなど、閉じたコミュニティとならないように細心の注意を払っています。発表者を事前募集せずに回しているのも特徴だと思います。

2.3 告知・集客の工夫

現在主な告知は2通りで、一つはハガキサイズのフライヤーを参加者に配布し“招待状”という形でご友人に紹介いただく形式をとっています。もう一つはFacebook¹⁾を活用し、告知と同時に参加者管理にも使用しています。

また、活動の軸をぶらさないようにしながらも、定期的にBBQや忘年会などを同時に実施し、活動に変化をつけるようにしています。



図1：フライヤーの表面(招待状の形式になっている)

2.4 会場選択

開始から3年ほどは天満橋のお店・スペースを借りる形で実施していましたが、以後は複数会場を不定期に巡回する方針に変更しました。まちライブラリー@大阪府立大学(大阪府立大学のサテライトキャンパス内)や、紀伊國屋書店グランフロント大阪店での開催など、会場を変化させることで新たな繋がりや取り組みも生まれ始めています。

3 他地域への普及活動

3.1 公立図書館での開催支援

2011年3月に全国初の公立図書館開催となった奈良県立図書情報館をはじめ、堺、伊丹(ことば蔵)、西宮など様々な場所での開催支援に関わらせていただいています。このような支援の際には、開催図書館側の自立を前提として意図的に天満橋ビブリオバトルがずっと関わる事がないようにしています。そうすることでより効果的な普及が進むと考えています。

また、生駒、ふしみ、八尾、和歌山などからも、主催者が情報交換を兼ねて参加するなど、関西における活動のネットワークハブとしての機能を有しつつあります。

3.2 その他の普及活動

公立図書館以外にも、水都大阪やあべのハルカスの縁活などのプロジェクトへの出張開催や、兵庫県のフォーラムなど、様々な関わりをさせていただいております。

参考文献

- 1) <https://www.facebook.com/bibliobattle>

生駒市図書館

生駒ビブリオ倶楽部

「ビブリオバトル in いこまの事例について」抄録

■ビブリオバトル in いこまの歴史（概要）

- ・2012年12月：生駒市図書館で生駒市出身の作家、森見登美彦氏の作品にちなんだテーマで初開催
- ・2013年 4月：定例開催に。
- ・2013年 6月：市民によるビブリオバトル団体「生駒ビブリオ倶楽部」発足。
- ・2014年 3月：年齢制限なしの「関西大会」を開催。
その他、学生大会の予選も開催。

■ビブリオバトル関西大会

- ・2014年3月に初開催。19団体から23名がバトラーとして出場。年齢層としては中学生から社会人までが集まった。参加者は114名。
- ・本年度も2015年3月22日（日）に生駒市図書館にて行う予定。

■ビブリオバトル全国大会 in いこま

- ・年齢制限なしで、ビブリオバトル全国大会を2015年9月に生駒市図書館で開催予定。
- ・予定日程：2015年9月20日（日） 生駒市図書館にて。
※予選・決勝を同日に行う。
※発表者は30～42人を予定。

ビブリオバトル in Iwate Prefectural Library

○高橋 加奈（岩手県立図書館）

1 はじめに

岩手県立図書館では、2013 年の「第 67 回 読書週間」から、ビブリオバトルを開催している。

利用者参加型イベントとして展開するビブリオバトルは、岩手県立図書館が積極的に行っている「利用者も主体的に参加できる」イベントとして力を入れているところであり、使用する会場についても図書館内のほか、地域の読書推進イベントと連携して地域の駅ビルを会場に開催もしている。

開催当初は県内における認知度が低かったビブリオバトルも、今年の読書週間では地域紙上で大きな記事扱いで取り上げられるなど、当館利用者や県民にアピールする機会が増えて注目度も高まっている。



2 ビブリオバトルの開催状況

当館のビブリオバトルは、2013 年 11 月からはじまった。この頃は、東北地区、ひいては岩手県内におけるビブリオバトルの認知度は極めて低く、まずはどのようなものであるかを多くの利用者に知ってもらいたい、という目的で企画したものである。

第 1 回目のビブリオバトルは、2013 年 11 月の土曜日の夕方に行った。時間は 30 分程度の開催とし、バトラーは 5 名を定員とした。会場は当館で映画会や講演会に利用する、定員 73 名の小さなシアターを使用した。バトラー（発表者）については募集開始と同時に申し込みがあり、ビブリオバトルに興味を持つ利用者層が潜在することを主催者側が把握できるスタートとなった。

第 2 回は同月に再度開催した。前回は夕方の開催だったが、実験的に祝日の日中に行い、時間等の変更でバトラーやオーディエンス（観覧者）の反応を見ることも目的のひとつとした。

この後、第 3 回を 2014 年 1 月に行い、5 月には第 4 回のビブリオバトルを開催している。第 5 回は「第 68 回 読書週間」にあわせて 2014 年 11 月に開催した。第 2 回開催からはバトラーの定員 5 名は変更せずに、イベント自体の開催時間を参加者に拘束ストレスのない 1 時間程度としている。

この他、当館では中学生の体験学習のプログラ

ムにビブリオバトルを取り入れたりしながら、ビブリオバトルが広く認知されるように努めている。

なお、2014 年 5 月の第 4 回開催の直前には、「モリプロ」と呼ばれる、地域の読書イベントと連携をして地域の駅ビルでビブリオバトルを行った。これは、ビブリオバトルを図書館内ではない、公共性のある場所を会場とすることで、広く県民に知ってもらうという目的のある開催であった。

駅ビルでの開催は当館としても初めての試みであったが、盛況のうちに終了した。後日イベントを見たという方から問い合わせ等もあり、図書館でビブリオバトルを行うと同時に、図書館外で開催することの意義も感じている。

3 利用者参加型というイベントの魅力

ビブリオバトル終了後、観覧者からは「思っていたよりずっと面白かった」、「次回は友人を連れてきたい」など好意的な意見が多く寄せられている。また、バトラーからも「いろいろな人と本について意見を交わした時間が貴重だった」、「他人からおすすめ本を教えてもらう機会はなかなかないので、勉強になる」等の感想が聴かれている。

読書には基本的に「読み手」と「本」との関係しかないが、ビブリオバトルを通して、そこに他者とのコミュニケーションが生まれる。

このことにより、読書という体験が受け身ではなく共感を伴うものとなり、「本を通して人を知る、人を通して本を知る」というビブリオバトルのキャッチフレーズの通りに、本好きにとって魅力的なプロセスとなっていると考えられる。



4 今後に向けて

今後は、岩手県内の他図書館でもビブリオバトルを開催することを見据え、当館で運営のノウハウを蓄積して、必要があるときにフィードバックできるようにしていきたいと思っている。

少しずつ改善を加えながら、経験を活かした開催を当館で継続していくことはビブリオバトルのさらなる県内への普及、また県民に広く認識されることに僅かでも貢献するのではと考える。

ビブリオバトル東北チームの軌跡

○庄子 隆弘（ビブリオバトル東北チーム）

1 目的

東北におけるイベントや普及活動の紹介を通して、地域の普及委員が、より積極的にビブリオバトルに関われるようになればという想いを込めています。

2 主要団体の紹介

- (1) みちのく図書館員連合（MULU）
東北 6 県の図書館員を中心とした、顔が見えるコミュニケーションの活性化を図るためのコミュニティ。東北のビブリオバトルを盛り上げるべく、全国大学ビブリオバトル地区決戦や予選会の運営、独自のビブリオバトルイベントを行っている。
- (2) 宮教大ビブリオバトルサークルBIBLion
宮城教育大学で 2012 年にビブリオバトル普及のため誕生したサークル。現在はビブリオバトルのみならず、丸善書店で書棚をプロデュースするなど、精力的に活動を行っている。

3 活動記録

- (1) 徳島大学との Skype ビブリオバトル
宮城教育大学附属図書館の職員に協力をいただき、宮城と徳島間を Skype で繋ぎ、徳島大学生と BIBLion メンバーでビブリオバトルを行った。遠くにいても、本でつながることができることを実感した試みであった。



- (2) 泉図書館での中高生ビブリオバトル
仙台市泉図書館と BIBLion が合同で行った中高生向けの入門編的なイベント。何組かの小グループに分かれて、和気あいあいとした雰囲気で開催した。

- (3) 丸善“ビブ棚”プロデュース
丸善仙台アエル店にて月替わりテーマで、BIBLion メンバーが選書からポップの作成、書棚の入れ替えを行っている。



- (4) 青空ビブリオバトル
仙台市榴ヶ岡図書館と「みやぎのまつり」内のイベントとして、屋外の公園で児童書をテーマとしたビブリオバトルを開催した。



- (5) 研修講師
東北地区代表の貝森は、宮城県内の学校司書向けの研修、副代表の庄子はトーハン図書館ブックフェア 2014 東北会場にて、公共図書館司書向けの研修内での講演を行った。

以上

ビブリオバトル北海道の活動

須藤 秀紹（室蘭工業大学・ビブリオバトル北海道）

表 1: ビブリオバトル北海道の位置づけ

ビブリオバトル普及委員会	・ルール・商標の管理 ・全国的な事業の展開 ・全国的な情報の交換
ビブリオバトル北海道	・道内への普及活動 ・普及委員会の動向を道内団体に発信 ・道内の活動に関する情報交換 ・道内イベント開催団体の立ち上げ促進・運営支援 ・学生大会地区決勝の主催
道内各種団体	・各種イベントの実施を通じた交流や教育の実践

1 ビブリオバトル北海道

ビブリオバトル北海道の母体は、2011 年 3 月に「ビブリオバトル札幌」として誕生しました。「書評による地域活性化に関する研究会」（2011 年 3 月・札幌ビズカフェ）や「ビブリオバトル札幌ガチンコ書評合戦」（2011 年 6 月・紀伊國屋書店札幌本店）など、北海道内でのさまざまなイベント開催を経て、2011 年 11 月、ビブリオバトル北海道として活動を開始しました¹⁾。

2 ビブリオバトル北海道の役割

ビブリオバトル北海道としては、毎年行われている、学生の全国大会地区決戦の主催のほか、イベントを開催していません。それは、私たちの役割を「北海道内のビブリオバトルの普及促進と活動団体のサポート」と明確に定めているからです。

北海道内にはビブリオバトル活動を行っている社会人や学生のサークルが多くあります。このようなサークルの立ち上げや、立ち上げ後の運営のサポートが私たちの役割の一つです。また道内の教育機関や図書館から、ワークショップの開催や講演を依頼されることがあります。このような事業を通して、ビブリオバトルを広めていくことも重要な役割であると考えています。

一方、全国組織であるビブリオバトル普及委員会は、「ビブリオバトル」というゲームの商標を管理して、そのあり方について議論する場だと認識しています。また全国のビブリオバトル活動の動向について情報交換することも役割の一つだと考えています。この三者の関係をまとめると表 1 のようになります。ビブリオバトル北海道の具体的な活動内容は、随時公式HPで紹介しています¹⁾。

3 北海道内の主な活動団体

3.1 ビブリオバトル室蘭

室蘭工業大学の学生サークルです。北海道内ではもっとも古くから活動している団体です。学内での定期開催に加えて、地域商店会との協力イベントも積極的に行っています。これらの活動が評価されて、2014 年 3 月には、「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業 北海道・東北ブロック学生発表会²⁾」で準優秀賞（第 3 位）を受賞しました。

3.2 さっぽろビブル

札幌市を拠点として活動している社会人サークルです。社会人サークルとしては、北海道内でもっとも早くから活動している団体です。定期的

イベントを開催して、仲間を増やしています。また、全国学生大会地区決戦の際には、主力メンバーの一つとして運営にあたってくれています。

3.3 室蘭工業大学国際交流センター

室蘭工業大学では、2011 年より留学生向けの日本語授業にビブリオバトルを導入して継続的に実施してきました。ここでは公式ルールに加えて「読んでくる本は母国語でも良いが、発表は日本語で」というルールを追加しています³⁾。自分たちの国の文化を伝えたいという気持ちがモチベーションになって、表現力の向上に効果を上げています⁴⁾。2012 年には台湾の協定校でのデモ授業も行いました。

これらの活動が実を結び「外国人がもっとも多くビブリオバトルを楽しんでいる街、室蘭」として 2014 年 10 月に「第 1 回ビブリオバトル世界大会⁴⁾」が、ビブリオバトル北海道、室蘭工業大学国際交流センター共催のもとで実現しました。

4 今後の計画

小中学校や高校でのビブリオバトル活動をさらに活発にするため、道内の教育機関との連携を深めていくことが今後の課題です。

参考文献

- 1) [http:// www.bibliobattle-hokkaido.jpn.org](http://www.bibliobattle-hokkaido.jpn.org)
- 2) <http://www.akita-u.ac.jp/acep/>
- 3) 須藤秀紹, 山路奈保子他: 留学生のための日本語学習への書評ゲーム「ビブリオバトル」導入の試み, 日本シミュレーション&ゲーミング学会全国大会論文報告集 2012 秋号, 99/102 (2012)
- 4) 山路奈保子, 須藤秀紹 他, 書評ゲーム「ビブリオバトル」導入の試み～日本語パブリックスピーキング技能の育成のために～, 日本語教育, 第 155 号, 175/188 (2013)
- 5) <http://wbc2014.jimdo.com/>

ビブリオバトルを活用した課題解決型学習

○西村 浩子 (松山東雲女子大学)

1. 概要

本学では、2013年1月より「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」として「仕事力玉成プロジェクト」（通称GP）がスタートした。このプロジェクトで行った学生の汎用的能力を測定するPROGテスト¹⁾では、本学の場合、主体性・課題発見力・課題解決力が低いことが明らかになった。

そこで、課題解決型学習を通してこれらの力を向上させるために、ビブリオバトル 2013 の地区予選・ブロック代表決定戦の企画・運営を課題に設定し、発表者と 4 年ゼミの学生 3 名の計 4 名が「東雲ビブリオバトル実行委員会」となり、GP 研究員の指導を受けながら、上記の課題発見力・課題解決力の向上を図った。主体性については、各自が今回の取り組みに主体的に取り組めるよう、PROG テスト等での弱点を強化する個人テーマを設定し、それを意識しながら活動するようにした。

その結果、①混沌としたものを整理する方法を学びながら準備を進め（**plan**：地区予選の準備）、②実際に動いてみて（**do**：地区予選）③課題を発見し（**check**）、④その対策を考えて実行する（**act**）という、**acton+2nd plan**：ブロック代表決定戦」という、課題発見から課題解決に至る一連の流れを体験し、その力を向上させた。また、個人テーマを意識することにより、学生が自分から率先して動いたり自主的に発言したりする回数が増え、メンバーの相互理解や信頼関係が深まった。

2. 課題発見

2.1PLAN（愛媛地区予選の企画）

2013年7月～8月に、3年9名をバトラーとする地区予選会・ブロック代表決定戦をそれぞれ10月18日（金）・10月27日（日）に開催することを決定した。そして、高知大学の中道一心助教授と連携し、ブロック代表決定戦は松山東雲女子大学・短期大学図書館で行うことにした。また、松山市の企業（書店）への後援依頼や近隣の店舗へのポスター掲示等の協力依頼も行うこととした。

7月から10月の4カ月間、ほぼ毎週1回集まり、GP研究室で活動行った。GP研究員の指導は、主に、MECE (Mutually Exclusive and Collectively Exhaustive) 相互の排他的な完全な組み合わせの原則、モレなくダブリなく)による情報整理である²⁾。これは、各学生のアイディアは良いものが

出るが、ビブリオバトルの大会を実施するには、足りないものや重複するものがあるため、アイデアや情報を整理して、構造化して考える方法を用いた。（例：5W1H、マトリクス、優先度・重要度の分類、実行可能性の分類、役割分担、期限等について等）

なお、2013 年は、本学で初めての取り組みということもあり、松山市内の他大学への情報提供は、愛媛大学図書館や松山大学図書館、愛媛県立図書館等へのチラシ配布に留まった。ただ、近隣の店舗へのポスター掲示が功を奏し、愛媛大学の学生も観戦者として参加した。

2.2 DOとCHECK（愛媛地区予選の運営）



図1：予選会の様子（NHK四国放送局の取材）

課題として見えたのは、事前準備やリハーサルを手を抜かずに行うことや、報告・連絡・相談という基本的なことの大切さであった。

図 2：予選会での紹介本リスト

第1回試験 14:40 ~ 15:40	
問題一覧	
ごあいさつ	
2. 読み説明	
★☆☆☆☆★☆☆☆☆★バトル★国語★☆☆☆☆★☆☆☆☆★	
No1. 吉川 廣成	「たむけ町御尊」 西郷 蘭
No2. 長崎 少弥	「おむねの野」 奥野 修司
No3. 藤島 雄雄	「娘のおもてなし」 有川 浩
No4. 荒見 曜樹	「人はワランヤン」 水野敬也、黒田 直樹
No5. ティム・ギンザン	「猫の法則」 野口 武彦
☆☆☆☆★☆☆☆☆★バトル★国語★☆☆☆☆★☆☆☆☆★	
3. 投票	
投票、結果発表	

第2回試験 16:00 ~ 17:00	
問題一覧	
☆☆☆☆★☆☆☆☆★バトル★国語★☆☆☆☆★☆☆☆☆★	
No1. 黒川 孝和	「永遠の0」 吉田 研樹
No2. 高橋 涉朗	「新しいまちの桜並」 米澤 健雄
No3. 野田 俊衣子	「藤田 晶子」 「アリス」おひつねとるの姉妹が おきてくたえまごい」 藤田 淳
☆☆☆☆★☆☆☆☆★バトル★国語★☆☆☆☆★☆☆☆☆★	
3. 投票	
特別賞選：山本 有紀先生「西の魔女が死んだ」脚本 藤井 隆幸	
4. 投票、結果発表	
問題一覧	
投票	

3. 課題解決 ACTION+2nd PLAN・DO(愛媛・高知ブロック代表決定戦の企画・運営)

地区予選での課題が改善され、かつ自主的な動きがよりスムーズにでき、成長に目を見張る運営であった。

4. 学生の評価・感想（資料配布）

注

- 1) 河合塾とリアセック社が開発した、ジェネリックス
キルを測るテスト。
- 2) コンサルティングファームのマッキンゼー・アンド・
カンパニーが考案し、世界中のビジネスの現場で使わ
れている手法。

ビブロフィリアの活動

○ 岡野 裕行（皇學館大学文学部国文学科助教）

1. ビブロフィリアの成り立ち

ビブロフィリア（皇學館大学ビブリオバトルサークル）は、学生団体として2012年7月24日に設立しました。普段は皇學館大学附属図書館のラーニングコモンズを拠点として、メンバー同士で放課後に活動しています。また、年に数回は食事を共にしながらビブリオバトルを楽しんでいます。学内の普及活動の詳しい経緯は、『ビブリオバトル入門』への寄稿文をご確認ください¹⁾。

2. ビブロフィリアの広報活動

ビブリオバトルの広報活動については、主に以下のような方法をとっています。

- ①ブログおよびツイッターの活用
設立時より、公式ブログですべての活動記録を公開しています²⁾。また、ツイッターを活用して情報発信も随時行っています³⁾。
- ②サークルへの勧誘
主に新入生向けの勧誘を行っています。首都決戦の予選会などをきっかけに、2年生や3年生が途中入部してくるケースもあります。
- ③図書館総合展でのポスター発表
2013年5月に行われた「図書館総合展フォーラム2013 in 伊勢」では、サークル活動を紹介するポスター発表を、図書館関係者向けに行いました。

3. 学外コミュニティでの活動

ビブロフィリアに対して、「実際にビブリオバトルをやっているところを観てみたい」という要望が寄せられることがあります。そのような要望に応えるため、メンバーが学外の会場に出張してビブリオバトルを行うこともあります。

- ①古本イベント「ホンツヅキ」での開催
2013年6月に、三重県津市で開催された古本イベント「ホンツヅキ」のなかで、ビブリオバトルを披露しました。

- ②三重県総合博物館（MieMu）での開催
2013年10月、県立博物館のオープンスペースを舞台に、ビブリオバトルを披露しました。

4. ビブリオバトルの企画と実施

ビブロフィリアのメンバーが企画・運営側にまわり、一般参加者を募ってビブリオバトルを開催することもあります。以下の事例があります。

- ①教職員ビブリオバトル
2012年以降の学園祭のなかで、毎年教職員の方々にバトルになってもらっています。
- ②商店街ビブリオバトル
2013年11月に、地元商店街と協同して「商店街ビブリオバトル」を企画しました。
- ③全国大会の予選会開催
過去に行われた「ビブリオバトル首都決戦」や今回の「全国大会ビブリオバトル」において、予選会主催団体として活動しました。

5. ビブリオバトルの開催支援

2013年度に、三重県教育委員会が「高校生ビブリオバトル」を企画し、ビブロフィリアに協力を要請してきたため、共催という形でメンバーが大会の運営・進行などを行いました。

2014年度は、三重県内を6ブロックに分け、それぞれの地域内の高校生を対象に開催しています。また、各地域を勝ち抜いた高校生バトルを集め、2015年2月に本学で三重県大会を開催する予定となっています。

参考文献

- 1) 岡野裕行「皇學館大学におけるビブリオバトルの導入と展開」『ビブリオバトル入門』情報科学技術協会, 2013, p.32-36.
- 2) 皇學館大学ビブロフィリア 公式ブログ, <<http://bibliophilia-ku.blogspot.jp/>>
- 3) 皇學館大学ビブロフィリア ツイッターアカウント, <https://twitter.com/bibliophilia_ku>

龍谷大学図書館ビブリオバトルのあゆみ

○龍谷大学図書館 ライブラリーサポーター ビブリオバトル班

1 概要

龍谷大学図書館では、2013 年度に初めてビブリオバトルを実施した。併せて同年度からは、「ライブラリーサポーター」という図書館ボランティア制度も立ち上げ、学生による図書館サポートのための様々な取り組みがなされている。

2014 年度からは、ビブリオバトルの実施にも、このライブラリーサポーターが 関わり、ポスターの作成や実施当日の司会進行などの役割を果たしている。また 2015 年 3 月には、オープンキャンパスでのビブリオバトルの開催（テーマ：「龍谷大学」）を予定している。

今回のポスター発表では、これまで 3 回開催された龍谷大学図書館ビブリオバトルのあゆみを紹介し、今後の展望に繋げたい。

また本抄録では、ビブリオバトル活動を行っている「ライブラリーサポーター」について、その成立の経緯を含め、整理した。

2 図書館の役割の変化

「TeachingからLearningへ」という言葉に代表されるように、学習のあり方が大きく変わろうとしている中で、図書館にも「新しい場」としての役割が求められている。

さらに図書館が他部署から隔絶した存在ではなく、様々な学習支援の連携の拠点として機能していくためには、それぞれの大学のミッションに連動した学習支援空間としての図書館の存在意義を確立し、運営する職員の養成も急務となってきている。

3 「グループ学習エリア」での学習支援の展開

2012 年度には、学生主体の自主的な学習空間の役割を担うべく「グループ学習エリア」を深草図書館に設置した。グループ学習エリアは、図書館入館ゲート脇の文庫・新書コーナー（約 200 m²）の書架を移動し、グループ学習に適した什器（70 席程度）を配置しただけの小規模なものである。無線 LAN の対応は可能であるが、常設 PC 等の設備もなく、またプレゼンテーションに対応した機器もない。開設にあたっての施設改修も最小限にとどめることとした。

グループ学習エリアの開設記念事業を以下のように実施し、学生の自主的な図書館利用の促進を計った（①館長懇話会、②私のお薦め本コンテスト、③

文章力アップセミナー、④学生スタッフによる広報誌、⑤記念展覧等）。

その後、2013 年度・2014 年度ともに、上記①～⑤の事業を展開し、グループ学習エリアの利用を契機とした学生の自主的学習の涵養を図っている。

4 ライブラリーサポーター制度の立ち上げと今後

さらに、2013 年度からは、学生のボランティア制度である「ライブラリーサポーター制度」を立ち上げ、学生協働をととした図書館運営についての試行を行っている。

ライブラリーサポーターは、2013 年度は図書館司書課程の受講生に限定した募集を行っていたが、2014 年度からは広く一般学生にも門戸を広げた。その結果、「ビブリオバトルの実施」や、「教授の愛読書」、また「図書館メモリアル企画」の実施など活動の幅が広がっている。同様の取り組みを行っている「京都女子大学図書活スタッフ」との交流も含め、今後もさらに活動を充実することに努めたい。

さらに、2015 年度には、深草図書館（中央図書館）が新棟に移転することとなり、図書館では「ナレッジ・コモンズ」の展開を行うこととなる。この新図書館では、ライブラリーサポーターの活動を日常的な図書館運営に位置付けるべく、学生による積極的な活動に期待したい。



参考文献

- 1) 龍谷大学図書館, 図書館報『来・ぶらり』, No.47, No.49, 2013-2014
- 2) 村上孝弘, 「グループ学習エリア」における学生支援の試みー小規模な施設改修に伴う学習スペースの設置事例, 第 19 回大学教育研究フォーラム発表論文集, 136-137 (2013)

立命館生協の読書推進活動

○佐藤 由紀（立命館生活協同組合）

山西 尚子（同 上）

1. 立命館生協でのビブリオバトル

2010年に立命館大学情報理工学部・谷口忠大先生から生協書籍スタッフにご案内をいただき、生協職員が実際に体験するところからスタートした。その後、生協店舗の書籍フロアでのビブリオバトル開催を重ね、2014年度は全国大学ビブリオバトル京都決戦の予選会を実施した。

2. 立命館生協での読書推進活動

1) ビブリオバトル

立命館生協では2013年「ビブリオバトル」（文春新書）発刊を機に、滋賀のびわこ・くさつキャンパス内書籍店舗店頭でビブリオバトルを実施した。以後衣笠キャンパスでも実施されるようになった。

2) 読書マラソン

法政大学生協での取り組みに始まり全国に広がったもので、立命館生協でも2004年から実施。既読本の紹介コメント（POP）を生協店舗に持参し、一定の数が溜まると割引券などのインセンティブがある。同じ大学生の推薦がついた本を陳列することで、新たな読者層の獲得と、大学生協らしい組合員参加の店舗づくりが狙い。

3) ブックカフェ

本好きの学生に集ってもらい、好きな本を語り合ってもらおう。

4) コメント大賞

読書マラソンのコメントの中から優秀なものを表彰しようという取り組み。

3. 成果と今後の課題

立命館生協は大学生の学びと成長を支える視点から読書推進を重点課題に掲げ、多読層へ光を当てるとともに、大学生の読書層を広げることで書籍店舗の活性化にもつなげることができると考えており、2005年以降様々な読書推進（応援）の取り組みを行ってきた。

これらの活動をあらためて俯瞰すると、本についての感想や思いが、紙（読書マラソンでのPOP）から口頭（ブックカフェでの語り）、さらにプレゼンテーション（ビブリオバトル）へと移ってきたと考えることができる。読書という行為だけでなく、読書を通じた何かにつなげられる様々な可能性もあるのではないだろうか。読書マラソン等ではエントリー者や応募者の「すそ野を広げる」ことが難しかったが、複数の活動を行うことでより多様な読者層が生協を通じて新たな読書へ向かうきっかけにしていきたい。

以 上

プレゼンテーション・ワークショップとしてのビブリオバトル —学生自主ゼミ「P5」の活動を通じて—

○木村 修平（立命館大学生命科学部）

1 学生自主ゼミP5について

P5 は、正式名称を「P5: English Presentation Workshop」¹⁾と称する立命館大学の自主ゼミである。正課授業で得られた知識をさらに発展させるために学生が自主的に結成するグループを立命館大学では「学びのコミュニティ集団」、通称を「自主ゼミ」と定義しており、同大学の学部生または院生3名以上が参加していること、3ヶ月以上の継続的学習期間を持つこと、教員が顧問として登録することが自主ゼミ公認の条件となっている。P5の顧問は発足以来筆者がつとめている。

P5は2012年度にスポーツ健康科学部生を中心に同学部に申請・公認された自主ゼミである。同学部の正課英語授業「プロジェクト発信型英語プログラム」²⁾で学んでいた学生らが、より高度な英語プレゼンテーション知識の習得と実践を行うために結成され、2014年現在までに計13回の勉強会・発表会を重ねている。

2 英語でビブリオバトルの試みと課題

P5では、過去2回、英語によるビブリオバトルの試みを立命館大学びわこ・くさつキャンパスで行った。第1回は2013年4月で、学部生2名、留学生1名、教員2名の計6名がバトラーとして参加した³⁾。第2回は同年6月で、学部生5名、留学生1名が参加した⁴⁾。

これら2回の英語でビブリオバトルの試みを通じて、日本人学生と留学生、そして教員が混在してビブリオバトルを行うという大学ならではのボーダーレスな知的交流は実現できたものの、顧問として筆者はひとつの課題を感じた。それは、特に日本人学生の多くがそもそも日本語でのビブリオバトルの経験が少なかったため、発表全体の構成や本の紹介ポイントなどに詰めの甘さが残り、プレゼンテーションとしてのクオリティがそれほど高くないというものだった。そこで、英語によるビブリオバトルはP5の活動からいったん切り離し、P5では日本語によるビブリオバトルの経験値を高めることに活動方針を切り替えた。（英語でビブリオバトルは、有志教員による関西の他大学の学生を巻き込んだ活動に展開した⁵⁾。）

3 日本語ビブリオバトルへの取り組み

2013年7月、JR南草津駅周辺で開催された地域イベント「みなくさまつり」の一環として開催された「くさつビブリオバトル2013～みなくさの陣

～」に参加した。このイベント内で大学生の部として行われたビブリオバトルは、同年11月に開催された「ビブリオバトル首都決戦2013」の地区決戦を兼ねており、P5からはそれに先立って自主ゼミ内で開催した地区予選⁶⁾の勝者が代表としてバトラー参戦した。その後もP5では継続的にビブリオバトルを活動の一環に取り入れ、2014年の「みなくさまつり」では開催協力団体として自主ゼミ代表者の学生が実行委員に参加した。

4 プレゼンテーション・ワークショップとしてのビブリオバトル

自主ゼミP5による計2回の英語によるビブリオバトルの実施、そしてそれに続く日本語でのビブリオバトル関連イベントへの参加を通じてわかったことは、ビブリオバトルはエビデンスベースのプレゼンテーションの基本的なノウハウの積み上げ、パブリックな話法の練習の機会として有効であるということだ。特に大学生の場合、語るべきコンテンツが不足していることが多いため、ビブリオバトルのように自分が読んだ本を紹介するという仕組みは非常に重要である。本を読むという行為がそのままコンテンツとしてプレゼンテーションの練習材料となりうる点もまた、ビブリオバトルが生み出す様々な機会提供の可能性の一つとして重要ではないかと考える。

参考文献・サイト

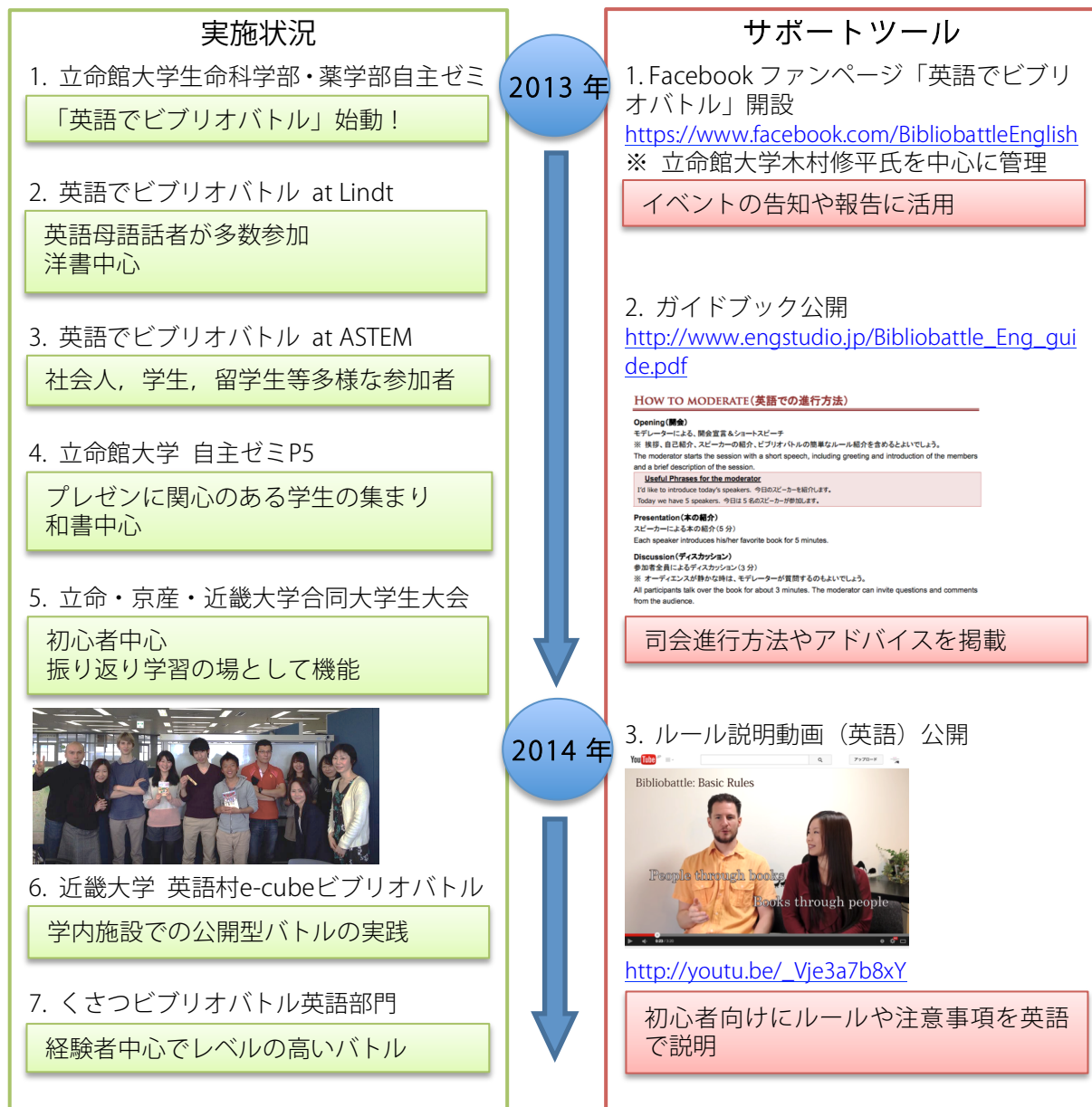
- 1) P5の活動の詳細についてはWebサイト (<http://mep.papiko.com/p5>) を参照。
- 2) プロジェクト発信型英語プログラムについて、詳細はWebサイト (<http://pep-rg.jp>) を参照。
- 3) P5 Session 5: <http://mep.papiko.com/p5/category/sessions/session-05/>
- 4) P5 Session 6: <http://mep.papiko.com/p5/category/sessions/session-06/>
- 5) 近藤雪絵、大賀まゆみ、山下美朋。(2013年11月9日)。本を知り人を知る書評ゲーム「英語でビブリオバトル」大学生大会の実践報告。JACET 関西支部 秋季大会 [口頭発表]。
- 6) P5 Session 7: <http://mep.papiko.com/p5/category/sessions/session-07/>

Let's play Bibliobattle in English!

「英語でビブリオバトル」実践の成果と課題

○近藤雪絵（立命館大学） 大賀まゆみ（立命館大学） 山下美朋（近畿大学）

「英語でビブリオバトル」は 2013 年 2 月より関西地区で実践が始められ、参加者や開催形態に変化を加えながら、現在までに 16 回実施された。加えて、参加の促進と広報活動を支えるサポートツールも公開された。



2 年間を通じ、参加者のニーズや英語習熟度に応じて様々な実験的取り組みを行った。Facebook 等のサポートツールは参加者募集や実施報告を円滑に行う上で活用され、取り組みは活性化された。英語で行うという特殊な状況から、ゲームを楽しむと言うよりは英語の学習に役立てたいという学生の参加者も多く見られた。ビブリオバトル本来の面白さを生かしながら、どのように「英語で」ビブリオバトルを実践していくかが今後の課題となる。

日本語プレゼンテーション入門としてのビブリオバトル ー留学生による2回のプレゼンテーションの比較からー

○山路奈保子（室蘭工業大学） 須藤秀紹（室蘭工業大学） 深澤のぞみ（金沢大学）

1 はじめに

本発表は、大学・大学院の外国人留学生を対象とした中級レベルの日本語授業にビブリオバトルを導入した結果の報告である。

外国語の授業にスピーチ・プレゼンテーションの訓練を取り入れた場合、習得レベルや設定されたテーマに対する興味の濃淡により参加者のモチベーションが大きく左右されるという問題がある。その点、ビブリオバトルは、テーマ設定の自由度の高さと、投票でチャンプ本が決まるという仕組みから、レベルや興味の差に影響されにくく、外国語学習活動の一環として取り入れる利点は大きいと考えられる¹⁾。

本発表で紹介する授業では、受講学生がそれぞれ2回ずつバトラーとなった。本発表では、学生によるプレゼンテーション第1回・第2回の比較と、各回のビブリオバトル実施後にバトラーに対し行ったアンケートの分析結果を報告する。

2 プレゼンテーション1・2の比較

第1回から第2回で最も得票を伸ばした学生CH5を例に、プレゼンテーションの内容がどのように変わったかをみる。CH5の第2回プレゼンでは以下の5つの点で改善がみられた。

①本の選択

第1回、第2回とも写真集の紹介であったが、第1回が著者の意図について複雑な説明を要するものであったのに対し、第2回は誰もが知っている有名な犬の写真集で、設定が単純であり、本そのものに関する説明が簡単であった。

②語彙・表現の選択

第1回では、内容説明に最も重要なキーワード「結晶」が外国人学生にとって聞いて理解できる語彙ではなかったため、プレゼンテーション全体も理解されていなかった。第2回では難解な語彙がほとんど用いられず、日本語レベルが十分でない学生も含め全員が理解できる内容であった。

③発表内容の構成要素

第1回はほぼ本そのものの説明だけであったが、第2回では自身が日本語の本を読むのに苦労した経験が語られた。これにより同様の経験を持つ学生たちの共感を得ることに成功したと思われる。

④談話の展開のしかた

第2回では本を薦める理由を中心にした明快な構造をとっていたのに加え、「この本をお勧めしたい理由は2つあります。1つ目は～」と展開を

予告する表現を入れ、聞き手にとってより理解しやすくする配慮がなされていた。

⑤聴衆とのインターアクション

第2回では導入部分に「ソフトバンクの『お父さん』知っていますか？」と聴衆に対する問いかけを入れて聴衆の興味を引き付け、本の中にある写真を使って笑いを誘った。また、第1回では話の途中でタイムアップがきてしまったのに対し、第2回では終了直前にタイマーを振り返り、急きょ話をまとめてちょうど5分で終わることができた。これは聴衆の表情から時間が迫っていることに気付いたからである。つまり、話しながら聴衆の様子を観察する余裕があったということである。

3 ビブリオバトル終了後アンケート

ビブリオバトル実施後のアンケートでは、聴衆の理解・興味の獲得と質疑応答の成功に関する自己評価において上昇がみられ、2回のプレゼンテーションで聴衆とのインターアクションに自信が深まったことがうかがわれた。

4 まとめと今後の課題

ビブリオバトルはプレゼンテーションに対するモチベーションおよび聴衆の理解や共感に対する意識の向上に効果的であり、日本語学習者の日本語プレゼンテーション技能育成に有効であることが示唆された。発表者らは、話し手と聞き手に共通する経験や考え、感情等に言及することにより、両者が共有する理解基盤を顕在化させる行動を「コンテクスト共有」と呼び、その分析と類型化を試みているが²⁾、日本語授業でのビブリオバトルを用いた指導においても、共感獲得のしぐみに焦点をおいた効果的な指導法を検討していきたい。

参考文献

- 1) 山路奈保子, 須藤秀紹, 李セロン: 書評ゲーム「ビブリオバトル」導入の試みー日本語パブリックスピーキング技能育成のためにー, 日本語教育, 155号, 175/188 (2013)
- 2) 山路奈保子, 深澤のぞみ, 須藤秀紹: パブリックスピーキングにおけるコンテクスト共有ー「ビブリオバトル」導入部の観察からー, 2014年度日本語教育学会春季大会予稿集, 341/342 (2014)

ビブリオバトル：アカデミック・リテラシーにおける 図書館職員との協働

○廣瀬 清英，藤澤美穂，平林香織（岩手医科大学人間科学科）

鈴木晴香，芳賀真理子，渡辺敦子，千葉基弘，館野雅之（岩手医科大学図書館事務室）

1 はじめに

本学では、中教審の質的転換答申に対応させるため、大学での学びに必要な態度・技術の基本として、図書館の利用法、論説文・資料読解方法・資料整理法といったリサーチ・スキル、プレゼンテーションの方法や論理的な文章やレポートの書き方といったアウトプット・スキルを身につけさせ、コミュニケーション能力、聴く力、話す力を向上させ、他人との意見交換を積極的に行えるようにさせることを目標に、専門的な学修に向けての基礎力を養うためのアカデミック・リテラシー（以下、アカリテ）を初年次教育に導入しており、その一環として今年度からビブリオバトルをアカリテに導入することになった。これまでも、「図書館活用術」の講義・演習を図書館が担当していたことから、「ビブリオバトル」の導入に際し、人間科学科と図書館員との協働が実現した。

2 ビブリオバトル導入の経緯

初年次教育に特色あるものを取り入れたいという点に加え、本学図書館の利用状況を見て、学生の読書量の少なさを改善したいということもあった。コミュニケーションの場づくりのツールとしてのビブリオバトルの4つの機能¹⁾の中に、「書籍情報共有」と「良書探索」があることから、この2点を満たすことが読書量の増加に有効であると考えた。

ただし、本来なら本好きが積極的に行うべき書評合戦を、読書自体に興味が無い学生に強制的にやらせる意味があるのかという懸念もあった。この点に関しては、医療系大学ということもあり、今まで大学受験のために本を読む機会が少なかった学生に、強制的にでも読む機会を与えることで読書への興味を持つきっかけとなると考えた。そのことが読書量の増加につながることを期待した。

3 アカリテにおけるビブリオバトルの概要

企画段階では、図書館員が公式ルールや他大学の事例について情報収集を行い、それらを参考にした。

アカリテの履修者は学年全体 374 人（実際の参加者は 369 人）、普段の4クラスは 90～97 人と大人数である。この人数で実施するための工夫として、1日目に2段階のグループ・カンファレンスとして①小グループバトル、②グループ内4人でのバトル、

さらに③クラス・マッチを行い、2日目に④最終決戦を行う4段階の勝ち抜き制バトルを用意し、教員・図書館員が2名1組で4グループに対応した。

学生にはビブリオバトルの開催までに、1か月半の事前学習期間を与えた。図書館ではビブリオバトル向きの本を配架したり、貸出延長の措置を行ったりした。

紹介する本について、しっかり読み込み、伝えたいことを整理してもらうために、「My Biblioの魅力」と「コンテンツ・シート」を作成させ、提出させた。

ルールはビブリオバトル公式ルール¹⁾を用いたが、①小グループバトルでは、本学独自の補足ルール（プレゼン3分、質疑応答なし）を追加して実施した。

4 ビブリオバトルの成果

最終決戦は500人収容の学内講堂において大会形式で行った。どのバトルのプレゼンも個性的で説得力に富んでおり、甲乙つけがたかった。

学生全員がジャッジを行い、図書館員を通路毎に配置しカウンターで計測・集計した。活発な質疑も行われ、会場に一体感が生まれていた。

ビブリオバトルの準備段階で学生が図書館に目と足を向ける良い機会になった。

事後、最終決戦本を中心に図書館の貸出数が増え、学内書店での売れ行きも好調で、読書量の増加につながった。

5 次年度への課題

学生アンケートによって、予選から最終決戦を通して、時間数の増加といった意見や、同じプレゼンが続くことの弊害が指摘されたことから、次年度のアカリテ全体の構成の見直しが必要と考える。

最終決戦では、前半よりも後半の盛り上がりが大きくなり、質問も学生側から積極的になるようになったことから、学生の決戦前に教員によるエキシビションなどを行うことで、前半から会場が盛り上げる工夫が必要との意見が出された。

参考文献

- 1) 谷口忠大，ビブリオバトル，95/191-194/262，文春新書（2013）
- 2) ビブリオバトル普及委員会，ビブリオバトル入門，28-41，一般社団法人情報科学技術協会，2013

小中学校・地域・大学と連携した 「くさつビブリオバトル2014@BKC」の取組

中村 真理子（滋賀県 草津市教育委員会事務局学校教育課）

1 「オール草津」で読書活動を支援

草津市内の小中学校が、ビブリオバトルを始めたのは、草津市の「学校図書館活用推進事業」の一環として推奨したことがきっかけです。この事業では、各小・中学校に学校司書や運営サポーター、学校図書館ボランティアを配置。日常的に子どもにも図書支援が行えるようにして、子どもの主体的な学習活動を支援する場や、情報活用能力を高める場としての学校図書館の価値を高め、豊かな心の育成と学力向上を図っています。

事業のキャッチフレーズが、「オール草津で子どもを育てる～もっと本を読む子どもを育てる～家庭で 学校で 図書館で」であるように、保護者や地域と連携していることも特徴です。

2 市でイベントを開き、周知を図る

ビブリオバトルも、考案者の谷口忠大准教授が在籍する立命館大学が市内南部にあり、市と大学が連携協定を結んだことから、積極的に推し進められるようになりました。

草津市教育委員会は、まずビブリオバトルを市民に周知しようと、昨年度、平成25年11月、市の行事の1つ「みなくさまつり」において、「くさつビブリオバトル2013 みなくさの陣」を開催しました。発表者は、小学生、中学生、一般・高校生、大学生の部に計50人。参観は自由であり、会場にはさまざまな年代の人々が集まりました。

質問タイムでは会場からさまざまな質問が飛び出し、本を介して地域の人々の世代を超えた交流が見られました。

また、小学生や中学生が大学生のレベルの高い発表に驚いたり、逆に中学生が小学生のしっかりした発表に感心したりと、異年齢同士で刺激を与え合う場にもなりました。



3 本を介した学校・地域・大学との新しいコミュニケーション



最近、小・中学校を訪れると、自分たちの思いを生の声で伝え合う場面が増えていると感じます。市内のある中学校では、創立記念行事の1つが生徒自身の手で企画・運営されていました。これは、今後、社会に生きる上で大切な力になります。ビブリオバトルは、そうした社会参画力にもつながる活動と捉え、イベントの実施などで学校を支援しているところです。

今年度は平成26年11月に、開催場所を立命館大学びわこくさつキャンパスに移し、2年目となるイベントを開催しました。(参加者総数約250名) 昨年度より実施したこのイベントを契機に、市内の小・中学校にビブリオバトルが広まり、授業だけでなく集会活動など様々な場面でも行われるようになってきました。共催している市立図書館や立命館大学との連携も一層深まるとともに、今年度からまちづくりに関わる市内のコミュニティ事業団との連携も始まったところです。このようにして広く市民に「ビブリオバトル」を知っていただき、これを契機に市内全体に広げていきたいと考えています。ビブリオバトルを通して、子どもから大人まで読書大好き人間を増やし、学校間、校種間の交流、草津市に住み、働き、学ぶ人たちによる世代を越えた交流のなかで、小さなバトルが市内あちこちで展開されることを願っています。

中学校・高等学校におけるビブリオバトル活用の提言

渋谷教育学園渋谷中学高等学校 司書教諭 ○前田 由紀・渡部 華代子

1 ビブリオバトルとの出会い

2010年11月東京都主催で行われた大学生による「ビブリオバトル首都決戦」を観に行ったのがきっかけとなった。観客も質問や投票ができるという全員参加型の楽しい書評合戦に新しい読書案内の息吹を感じた。早速、国語科と英語科の教員にその話をしたところ興味をもってもらい実験的に授業に取り入れてもらった。

2 中2国語科表現での授業

夏休みにお薦め本を一冊決めておく。

- ①ビブリオバトル台本作り
- ②隣人と本番ながら練習し互いにコメント
- ③グループ予選（情熱とユーモアが重要要素）
- ④決勝（クラス全体、コの字型机配列）
の全4コマの授業展開

予想通りどのクラスも生徒たちが積極的に参加し活気に満ちていた。良かった点は、日頃目立なかった生徒たちが発表することをきっかけに活発な面が見られたこと、絵本など自分では手に取らない本との出会い、プレゼンの工夫、紹介された本を皆が読むようになったことが挙げられる。

3 高1英語科での授業

冬休み中に一冊読んでBook Report提出

- ①ビブリオバトル スピーチプラン作成
 - ・ Book Title, Author,
 - ・ Brief Summary of the Book
 - ・ The Reason(s) You Chose the Book
 - ・ Three Best Things About the Book
- ②各グループでの予選
英語なので3分間とQ&A2分間
- ③決勝（クラスの前でスピーチ）

スピーチ原稿は、個別採点。英語でのプレゼンでは、グループとクラスのチャンプには、平常点を加算。初の英語でのビブリオバトルということで心配したが、それなりに皆出来て好評だった。

4 他校との図書委員会交流会

○他校での3校中学交流会

高校や大学のビブリオバトル大会はあるのに、

中学校版がないので、中学2,3年を中心に図書委員会を通して3校（男子校・女子高・共学）でビブリオバトル交流会を実施しようとお誘いを受け参加した。対戦後は、グループに分かれてランチを一緒にしてよもやま話に花を咲かせた。初めて出会う他校生ばかりだったが、本の紹介の後だったので、打ち解けて交流することができた。男子校と女子高の選んだ本の傾向に違いがあり興味深かった。

○本校での3校高校交流会

本校の図書館で、今年2校を呼んで開催した。対戦後は、茶話会で学校生活についてなど話がはずんだ。改まった感じではなく、気軽に友人と話すような口調での対戦は、心の垣根を越えて和やかな交流会となった。皆でお気に入りのポーズを決めて写真を撮り大爆笑して終わった。

5 外部大会への参加

昨年、活字文化推進会議主催で関東圏36名が学校代表として集まった。校内とは違った緊張感があり、熱意がひしひしと伝わってくる。発表者に聞くと、大勢の観衆を前に話す体験は、思いが伝わり楽しめたそうだ。その上、後の交流会では、参加した生徒との本好きの仲間の輪がすぐできたことが何よりの収穫だったようだ。

6 まとめ

原則は、仲間内での気軽な会を重ねて、新たな本との出会いの機会を増やしていきたい。英語でのビブリオバトルは、海外の人たちとの懸け橋にもなる。国内のインターナショナルスクールや海外での学校図書館での紹介も今後努めていきたい。

7 参考文献

- 1) 前田由紀、「ビブリオバトルがつなぐ生徒の知とコミュニケーション」、『学校図書館』:2013.7/通巻第753号、pp.33-35(2013年)
- 2) Yuki Maeda, "Bibliobattle": Creating A New Frontier of Intelligence Among Students, INTERNATIONAL ASSOCIATION OF SCHOOL LIBRARIANSHIP 2014 CONFERENCE, Moscow, Russia, Program P39(2014)